

そして、君はおとなになる

(1
↳
66 頁)

子どもにしか見えないモノがある。子どもにしか聞こえない声がある。

信じないならそれでけっこうだが、これは僕が小学六年生の夏に起こった本当の話だ。いや起こった、というのは変かもしれない。僕が好んで自分から飛び込んだのだから。強いて言うなら起こした、だ。

最後にもう一つ、これは僕の夏の話であり、冒険の話であり、そして僕の初恋の話でもある。

突然だが、僕はぬいぐるみとしゃべることができる。

そんな顔をして欲しない。信じないならそれでけっこう、と僕は最初に言ったはずだ。だいたい僕は全部のぬいぐるみと話せるワケではない。ただ一人のぬいぐるみと話ができるだけだ。

彼女の名前は「シロシロ」という。

彼女はシロネコだ。デフォルメがされていて、ずんぐりむっくりした、非常に愛らしい見た目をしている。手足も尻尾も短く、どちらかというところ枕やクッションに近い感じで、とんがった耳とヒゲによってかろうじてネコだとわかる。

僕は彼女をUFOキャッチャーで手に入れた。一目惚れだった。何度も何度も挑戦してようやくゲットした時はとても嬉しかった。当時の僕はおバカだったから、いくらでもすてきな名前があつたらうに「シロシロ」と単純に名づけてしまった。単純だが本人が気に入っているようなので、名前はそのままだ。

さて、ゲームセンターから家に連れて帰ると、なんとシロシロはしゃべるぬいぐるみだということがわかった。「ねえ」とごく普通に話しかけてきたから僕は心臓が飛び出るかと思つたが、シロシロの明るさと親しげな雰囲気のおかげですぐに慣れた。「どうやら私、君とはしゃべれるみたい！」と瞳をきらきらさせていた彼女の顔は忘れられない。

以来、僕はどんな時もシロシロと一緒に過ごしている。もはや、シロシロは家族みたいなものだった。ただ、シロシロは僕の前でしかしゃべったり動いたりしない。だから母さんも友達もそのことを知らず、僕を「ぬいぐるみを連れ歩いてしゃべっているおかしな子」と思っている。残念なことである。しかし、僕は変わった子だと思われてはいるものの、いじめられることはなく、まあまあ普通の人生を歩んできた。友達はいなかったけれど、シロシロがいれば友達なんかいなくても、さして困ることはなかった。

そんな僕らに危機が訪れたのは、僕が小学五年生になった春のことだ。

我が家に、新しい「お父さん」がやって来たのである。

新しいお父さんというのは、新しい掃除機とか新しい洗濯機とか、そういうのとは違う。全く違う。僕の生活や家族自体が、ガラッと変わってしまう大変なものだ。

ある日曜日、母さんは僕をファミレスに連れて行った。そこでは男の人が待っていた。母さんはニコニコしながら、男のことを、僕の新しいお父さんだと紹介した。その日から男は「お父さん」になって、僕らと一緒に暮らし始めた。

お父さんは変な人だった。母さんの前ではニコニコしているくせに僕の前ではひどく冷たかった。一緒に遊んだり勉強を見たりしてくれるのかなあと思っていた僕はガツカリした。しかし母さんにうったえても「涼介、そんなこと言わないで」と悲しそうにするだけでまるで話にならない。どうやら僕がお父さんのことを嫌っていると思われているらしい。違うのに、と僕はまたガツカリした。お父さんが来てから、家族がだんだんきしんでいく感じがした。

僕が小学六年生になる頃、母さんのお腹に赤ちゃんができた。母さんと「お父さん」の子どもで、男の子だそう。母さんもお父さんもお腹の赤ちゃんに夢中だった。うちにはベビ

ーベッドだのベビー服だのと赤ちゃん用の物が次々に揃えられた。お父さんは、「涼介もそろそろ部屋が欲しいよな」と有無を言わさぬ口調で言って、物置を整理して僕の部屋を作った。僕の荷物は全部そこに運び込まれた。家の中で、僕の居場所はそこだけになった。お父さんは母さんに赤ちゃんができてから、これまでも増して僕に冷たく当たった。母さんにはそれとわからぬ方法で、だんだん僕を遠ざけていく。僕が今までやっていたお手伝いは全部お父さんがとってしまった。図工の作品を持ち帰ると、お父さんはその日のうちに捨ててしまう。百点のテストも、マラソン大会の賞状も、少し目を通したら捨ててしまうのだ。僕のおもちゃや写真もどんどん捨てて、僕を塾に通わせ始めた。お父さんは僕を家の中から追い出そうとしていた。赤ちゃんも、母さんと、お父さん。僕の家で、僕の知らない家族がだんだんでき上がっていく。

そのうちに、小学六年生の夏がやって来た。

蒸し暑さから身を隠すように、僕は机に這いつくばっている。蝉がうるさい。ノートの隅に汗がぼたぼた垂れている。

「ねえ」

あと一週間で夏休み、と僕は指折り数えてみたが、別に楽しい気持ちは起こらなかった。

「お父さん」がうちに來てから家族旅行なんか一度もない。夏休みはどうせ、塾の夏期講習に行かされるだけだ。

「ねえ、涼ちゃん」

僕は聞こえなかつたふりをする。それなのに純はしつこく、立ち去る様子を見せない。

「ねえ涼ちゃん、ねえ、ねえねえねえねえ」

「なに！」

蝉といい勝負のうるささで話しかけてくる純を、僕はぎろつとにらんだ。純は怯えた様子もなく、ヘラヘラしている。ウザい。純はクラスメイトだが、僕はコイツを全く理解できないし理解したくない。うるさくてしつこくて気まぐれで、とにかく僕の一番嫌いなタイプだ。

「涼ちゃん、夏休み、一緒に遊ばない？」

「やだ」

「俺ね、冒険みたいなのしてみたんだ。実はね、ボートがあるんだよ！俺、この前見つけたんだよね。捨てられてたの。壊れてただけど頑張って直したんだ。それ使って川を下ったりは……」

「しない。だいたいなんで僕に言うんだよ。友達じゃないだろ」

僕の反論に、純は「誰を誘っても嫌だつて言うんだよ」と頬を膨らませた。当たり前だろ、と僕は思う。冒険？ ボートで川下り？ そんな幼稚でバカバカしいアイデア、誰が賛成するんだ。六年生にもなつて恥ずかしい。そんなことばかり言つてるから、純はクラスの誰からも嫌われている。

「勇気がないなあ、涼ちゃんは」

「勇気がないわけじゃない。あと、涼ちゃんつて呼ぶのをやめてくれ」

「ぬいぐるみなんかと話してるからだよ」

純は、机の横にぶら下がっている手提げを指さした。シロシロが少し顔を出して、つぶらな瞳で僕らを見ている。純の面白がるような言い方に僕はカッとなって、思わず椅子を蹴つて立ち上がった。ざわめいていた教室が一瞬静まり返る。

「……うるさい」

僕は渾身の怒りを込めて純に言ってやった。純はむすつとした顔で僕を見る。彼はまだ何か言いたげだったけれど、僕はもう純なんか見ないふりをして、窓の外を眺め続けた。

「まったく腹が立つ。二度と、純とは口をきかないぞ！」

僕は石を蹴りながら家へ向かっていた。じりじりと太陽が首筋を焦がす。なるべく日陰を歩くように気をつけ、僕は手提げの中のシロシロに話しかける。

「純は、涼介が一人ぼっちだから心配して声をかけたんじゃない？」

シロシロがばちばちと瞬きをする。

「そんなことはない。あいつはそういうやつじゃない。シロシロも知ってるだろう」

「それって、純が私をゴミ箱に放り投げた時のこと？」

『ぬいぐるみだと思わなかった』なんてしらばっくれやがって。追いかけてこしてたから鬼にぶつけてやろうとした、だと？ わざとゴミ箱を狙ったわけじゃないみたいだけど、あんなこと許されていいはずがない。おまけにちっとも反省の色が見えなかった」

「呆然としてたからじゃないかな」

「呆然と？　なんでだい」

「涼介がスライディングして、ゴミ箱を突き飛ばして私を受け止めたから」

「そののなにおかしいんだ」

「ねえ……なんか涼介っておマヌケだよ。面白いね」

僕はなんだかよくわからなかったが、シロシロが楽しそうなのでまあよしとした。

「だいたいあいつはお子様なんだ。なーにが冒険だ！」

「だけど涼介だって、冒険とか秘密基地とか大好きだったじゃん。ちっちゃい頃は家出する話、すごいしてたよね。自分だけで生活ってスゲー！　みたいな」

「ああ……」

たぶんその時の僕はドラマで家出の話を見て、憧れてしまったのだ。僕は昔から、冒険とか、子どもだけの旅とか、そんなのに目がなかった。今でも、うんと遠くに行きたいなあと思うことがある。だけど六年生になってそんなこと考えるのは変だから、シロシロ以外の誰にも言ったことがない。

「ねえ涼介、夏休みはなにをするの？」

「なにも。お父さんはどこにも連れてってくれないじゃないか。去年の夏だって、僕はずっと部屋にこもってゲームをしてた。今年は塾だろうけど」

「ゲームは嫌い。私ができるはずないじゃない。勉強はもっと嫌い！」

シロシロは短い手足をばたばたさせる。

「私、どこかに行きたいな。パパがいた時はもっといろんなところに行ってたでしょ」

「そうだなあ」

僕は石を蹴飛ばしながら、父さんのことを思い出す。僕の本物の父親のことだ。僕が低学年の時にリコンしてしまったから、それ以来会っていない。けど今でもよく、僕は父さんのことを思い出す。父さんは物知りで、よくしゃべる人だった。父さんといるとなんでも楽しかった。男ふたりで秘密基地も作ったし、カブトムシを捕まえに行ったり、ザリガニの自由研究もした。父さんは僕が好きだという物に本気でつき合ってくれた。

「シロシロはどこに行きたいんだい？」

「海！」シロシロはすぐに答えた。「海行きたい」

「海かあ。行ったね、父さんと母さんと。何年前だったけ」

「すぐくきれいだった。涼介が海に入れたから、私、砂でパサパサになったけどね。涼介、ママにめっちゃ怒られてた。でもすてきだったよ。私、もしここに船があったら、ずーっと遠くまで行ってみたいと思ったもん。涼介も海見て言ってたでしょ、僕は船乗りになるって」

「言ったかな、そんなこと」

本当はハッキリ覚えていたが、恥ずかしいのでしらばつくれた。しかしシロシロはそんな僕の心を知ってか知らずか「言ってたよー、あの頃の涼介は可愛かった。ねえ？」とからか

つてくる。

「なあ、シロシロ」

「なに？」

「僕、もしかしたら、よそへやられちゃうんじゃないだろうか」

「なにそれ。どういうこと？」

「お父さんの作戦だよ。例えば僕を、うんと遠くの私立中学校に行かせるんだ。それでその寮に入れるとか、親戚に預けるとかして、僕を家から出て行かせる。お父さんは僕にやら勉強させたがるだろ？ 実はそのためなんじゃないかと思う」

「あの人、涼介を家族から遠ざけようとするもんね」

「そうなんだよ。どうしたものだろう」

「どうしたものだろうね」

シロシロはニコニコして僕の話し方を真似した。僕は困っていた。困っていたが、大した悩みじゃなかった。だって僕にはシロシロがいて、僕のそばで話を聞いてくれて、どんな悩みにも明るく大丈夫と言ってくれたから。

そんな平和が破られたのは、夏休み直前の日のことである。

「ねえ涼ちゃん、だめ？」

「だめ」

明日からついに夏休みだ。暑い。だるい。そして純はしつこい。僕を何度も誘ってくる。ウンザリしながら断ると、僕の隣に座っている三崎さんという女子がこっそり「純くんは涼介くんと友達になりたいんだよ」と教えてくれた。

「どうしてそう思うの」

「だって涼介くん……人気者でしょ」

「僕が？」僕は目をぱちくりさせる。

「そうだよ。涼介くん頭いいし、運動できるし、その……顔もかっこいいでしょ」

「いつもぬいぐるみと一緒にだから、みんな気持ち悪がってると思ってた」

「だってそのぬいぐるみ……お父さんの形見なんでしょ？」

なにを言ってるんだと僕は三崎さんを見たが、彼女はとても真剣な顔だ。どうやら噂が回り回って、僕の父さんは死んだことになったらしい。僕にとっては都合がいい噂だったから、違うとは言わなかった。

「まあ、じゃあぬいぐるみのことはいいとして。だつてさ、みんな僕に話しかけてこないだろ？ つまらないやつだと思ってるからじゃないのかな」

「うーんとね、みんな友達になりたいけど、涼介くんってクールっていうか、なんとなく話しかけにくい。自分とは全然レベルが違うって思っただけで、気後れしちゃうんだ」

キオクレなんて、三崎さんは難しい言葉を知っている。

「だけど純は全然、気後れしてないように見えるけど」

「純くんは、ちよつと変わってるからね」

「ちよつとじゃない。すごくだ。すごく、変わってる」

「あのね……これ、私が三年生の時の話なんだけど」と三崎さんは前置きして、小声で僕に教えてくれた。「純くんって、いじめられてたんだ」

「いじめ？」

「そう。涼介くんはクラスが違うから知らないと思うけど、純くん、その時はほとんど学校来てなかったの。今でこそああやって普通に過ごしてるけどね、やっぱり子どもっぽいつていうか変わってるから、嫌われやすいんだと思う」

「なるほど」

純が嫌だという気持ちは変わらなかったが、いじめられていたというのは初耳だ。あまり意地悪をするのもよくないかもしれない。帰ったらシロシロに意見を聞いてみよう。彼女はなんと言うだろうか？　ちなみに、今日は砂埃がひどいので、シロシロを学校に連れて来ていなかった。前もこんな日にシロシロを連れて来たら、彼女は砂にまみれてクロネコみたいになったため、連れて行かない方がいいと判断したのだ。

「あ、涼介くん、帰りの会始まるよ」

三崎さんが教えてくれたから、僕は慌てて座った。先生が前に立って話す。机はすっかり片づけられて、がらんとした教室の中、みんな床に座ってじりじりと待っている。

「それではみなさん、さようなら！」

先生が元氣よく言う。そのとたん、ぱあつと弾けるように、みんながさよーなら！　と叫んだ。僕もクラスメイトに混じり、ぱたぱたと校門を駆け抜ける。澄み渡った青い空が、夏休み開始！　と、ぴーっとホイッスルを鳴らしているみたいだ。荷物は重いし、汗ばんだTシャツは肌に張りつくけどそんな気にならない。夏休みだー！　と僕は叫びたかった。例えなにもすることがなくなつて、いざ夏休みを迎えてみるとやっぱり嬉しいものである。

僕は小走りになつた。なんとなくワクワクした気持ちこそうさせたのだろう。砂埃と草の

濃い匂いが混じる道を行くと、夏が来たんだなあと思う。蝉がみーんみーんと鳴いている。さあ、今年の夏はどう過ごそうかとなんとなく前向きな気分になれる。

家に着く。早速シロシロと夏の計画を立てなくては。僕はドアノブを握る。壁には蝉の抜け殻がくっついていた。

「ただいまー……」

返事はない。母さんはお腹に赤ちゃんがいて病院に行っているし、お父さんは仕事か寝ているかだ。まあそんなことはどうでもいい。早くシロシロに会いたいと、僕は勢いよく自分の部屋のドアを開けた。

ドアを開けたとたん、お父さんとぶつかりそうになった。急ブレーキをかけた僕を、お父さんは嫌な顔で見た。お父さんの手にはゴミ袋があった。ここは僕の部屋だよな？ なんてお父さんがいるんだろう。なんだか嫌な予感がした。

「……なにしてるの」

つい、キツイ口調になってしまった。お父さんは悪びれもせず「整頓だ」と言ってるのける。

「お前の部屋、ずいぶん汚かったからな」

「ここ、僕の部屋だよ。勝手に入らないで」

「この辺の教科書、捨てるぞ。いらないだろ」

「あのさ」

僕はお父さんが教科書の次に手にとった物を見て、言葉を飲み込んだ。たぶんその時の僕は真っ青になっていたと思う。

「なんだこの気持ち悪いぬいぐるみ。お前、男のくせにまだ、こんなもん持ってるのか。これも捨てていいよな」

正直、そのあとの記憶はあまりない。お父さんはシロシロをつまみあげ、ゴミ袋に突っ込もうとした。僕はとっさにしよっていたランドセルを肩から外し、力任せにお父さんの顔に投げつけた。お父さんがよろめいた。僕はしつかりシロシロを腕に抱き抱え、そのままダッシュで部屋を飛び出した。お父さんの怒鳴り声が聞こえたが、ふり返ることはせずにそのまま、転がるように階段を駆け下りた。シロシロが叫んでいたが、なにを言ったのかわからなかった。たぶんお父さんへの怒りの言葉だ。僕はショックで口がきけなくなっていたみたいに黙り込んでいた。後ろでまた、お父さんの怒声があった。僕はスニーカーをつっかけると乱暴に玄関のドアを開ける。シロシロがまた叫んだ。今度はなにを言ったかわかった。いや、僕の叫び声だったのかもしれない。

「死んじまえ！」

僕は走った。ひたすら走った。鼻がツンとなつて、頭がガンガンして、喉の奥に詰まった涙をこらえるのに必死だった。

家を飛び出した僕はしばらく、公園をうろろろしていた。けれどあんまり暑いから、シロシロを抱いたままコンビニに避難した。自動ドアをくぐると、すうつとエアコンの冷気が僕の体を包む。僕はまだ鼻をグズグズ言わせながら、雑誌コーナーの前に立った。

「信じらんない。どういうアタマしてるわけ？ 私を捨てようとするなんて！」

シロシロはさつきからずっと、キイキイ文句を垂れている。僕はショックと怒りでしゃべる気になれず、黙って聴いていた。

「どうして私を気持ち悪いだなんて思うの？ こんなきれいな毛並みのネコなんかどこにだつていないでしょ、ふわふわだし。あいつの目は節穴か何かなの？ほんと、失礼しちゃう。

あんなクソジジイ、くたばっちまえ！」

シロシロの言葉に、僕も少しだけすかつとした。

「君はきれいだよ」

僕はシロシロのもこもこした毛並みに触れる。

「なにそれ、お世辞？」

「君はきれいだよ。白くてふわふわで、きれいな青い目をしてて、ちよつと気が強いけどおもしろくて優しく、賢い」

「そんなの知ってるよ」

「絶対に捨てられちゃダメだ」

「そりゃそうに決まってるでしょ。私は特別キュートで、特別賢いぬいぐるみだもの」シロシロはそう言ったかと思うと、ピンと耳を立てた。

「ねえ、誰かいる！」

「え？」

僕はキョロキョロとあたりを見回した。するとお菓子売り場の裏にサツと引っ込んだ影がある。誰だ？　もしかしてお父さんだったらどうしよう、僕を追ってきたのかもしれない。僕は息を潜めて近寄り、バツと売り場を覗き込む。

「純！」

僕が驚いて叫ぶと、純もかなり驚いたらしく「なんだよ！」と逆ギレ気味に返してきた。

「なにしてるんだ」

「涼ちゃんってさ……マジで、人形としゃべってるの。その、クマ？」と

「ネコだよ」

僕は純をにらみつける。「しゃべってたら悪いかよ」

純はわけがわからないという表情で僕を見ている。なんでだ？僕は学校でもシロシロとしゃべっているから、別に驚くことはないと思うけど。

「だって今、誰もいないじゃん。涼ちゃんってなんか……目立ちたいから、いつもぬいぐるみとしゃべってるのかと」

「はあ？ そんなわけないだろ」

僕は純のバカバカしい質問に答えながら、記憶をたどっていた。さつき、なんのセリフを純に聞かれたんだっけ？もしかして「君はきれいだ」？……僕は叫び出しそうになる。

よりにもよってその一言！純が戸惑うのも当然と言える。おまけに純はシロシロの声が聞こえないから、完全に僕の独り言。恥ずかしすぎる。しかし内心はどうあれ、表面上はきっぱりとした態度を作り、僕は凜として純を見る。

「お前はこんなところをなにをしてるんだ？」

「いたら悪い？ 飲み物を買いに来たんだよ。だってここ、コンビニでしょ？ 涼ちゃんこそどうしたの？」

「僕は」一瞬、言うべきか迷う。「家出だよ」
「え？」

純が顔をしかめる。からかわれたと思ったのかもしれない。僕は相手が純だということも忘れて言葉が続ける。誰かに話して楽になりたかったのだ。

「あのさ、家にいたくない時はどうしたらいいと思う？」

純はぼかんとして僕を見つめていたけれど、ふいに、ぱあっと顔を輝かせた。嫌な予感がある。純は期待に満ちあふれた表情で、自信満々に一言を放った。

「旅に出る！」

「え、何？」今度は僕が聞き返す番だった。

「家出しよう、涼ちゃん。ボートに乗って川を下ろう、海へ行こう。俺が直したボートだよ。ね、いいでしょ？ ここじゃないどこかへ行こう。ずーっとずーっと遠くへ逃げるんだ！」

「ええと、それはちよつと……」

「俺は冒険がしたい。涼ちゃんは家出をして遠くに行きたい。お互いの目的は合ってるでし

よ？ パーフェクトだよ！ ねえねえ、一緒に海に行こう！」

「海、すてき！」

シロシロが叫んだ。僕は困り顔でおろおろするだけだ。

「私、海に行きたい！」

シロシロが目を輝かせて僕を見てくる。彼女にそう言われてしまっっては逆らえない。

「い……行く。行くよ純。行きたい」

だからつい、僕は言ってしまった。シロシロのせいでもあった。だけど、冒険や家出と聞いて、僕の心がほんの少しだけ膨らんでいるのも確かだった。けれども僕は、バカバカしい、と感情を押さえつける。純と同じレベルになるのは嫌だったのだ。しかしそれでも僕の顔は少し晴れやかだったのだろう、純も満面の笑みを浮かべて「作戦立てようよ」と僕の顔を覗き込んだ。

話し合いは夕方まで続いた。その日は家に帰ったけれど、お父さんとは一言も口をきかなかった。僕らの様子を母さんは心配していた。でもお父さんは母さんのいる前ではなにもしないため「ちょっとしたけんかだよ」と笑っていた。母さんも「あらほんと？ けんかする

「ほど仲がいいものね」とトンチンカンなことを言う。なにも知らないんだから。僕は黙って夕食を食べ、さっさと部屋にこもって眠ってしまった。いや、実際は眠ったんじゃない。明日の用意をしていたのだ。話し合いによって、家出は明日。夏休み最初の日に決まった。

「涼介、実はワクワクしてるでしょ？」

シロシロがクスリと笑った。「別に」と僕ははぐらかす。

「遠くに行ってみたって気持ち、私はなんとなくわかるなあ。ボートに乗って海をぐんぐん渡って行ったら、世界の果てまで行けちゃいそうな気がしない？」

「する。世界の果てってどんなだろうね？」

僕は着替えをリュックに詰め込みながら答える。持ち物は少ない方がいいと純が言っていた。だからリュックに入れるのは着替えと水と食料だけ。あとはコンパスやポケットサイズの双眼鏡なんかを入れて完了だ。

「世界の果てはね、きつとすてきな場所だと思うなあ。なんでもあるんだよ」

シロシロはつぶやいて、ふわあとアクビをした。僕は時計を見る。だいぶ早いけど、明日に備えて眠らなくてはいけない。僕は「家出します。探さないでください」という簡単なメモを書いて机の上に置いた。そして目覚まし時計を朝の四時にセットしてベッドに横になる。

「おやすみ」

「おやすみ」

シロシロは僕のお腹に上ると丸くなって（もともと丸いけど）目を閉じる。そして半分眠っているようなふにやふにやしたしゃべり方で、なにかつぶやいた。

「ん？」

僕は耳を近づける。寝言らしく、あまり聞きとれなかったが、たぶんこう言った。

「さみしいねえ」

なにがさみしいのか僕にはわからなかった。寝言だろう。僕はシロシロの柔らかな毛並みをなでる。ふわふわした呼吸が温かく続いていた。

次の日、僕は目覚ましが鳴る前に起きてしまった。気持ちが高ぶっていたからだろう。

すぐに準備を整える。今日は土曜日で仕事がないから、お父さんも母さんも眠っている。

僕はそーっと玄関に向かい、静かに外に出た。玄関を出る時、僕は二度とここに戻らないのかと思うと不思議な気持ちがあった。けれど迷わず歩き出す。

「なんかドラマチック。冒険の始まりだね」

シロシロがリュックから半分顔を出した。僕はコクンとうなずく。不思議な興奮が僕の胸をしめつけている。僕が家出したと知ったらお父さんがどれほど驚くかと思つて、なんだかすつとした気分になつた。

「あ、涼ちゃん！」

約束の公園には、きちんと純が来ていた。僕も荷物は減らしたつもりだが、純のリュックはさらに小さくコンパクトだ。純はニコニコしながら、野球帽のつばをちよつと上げて僕に挨拶した。

「探検帽がないかと思つただけどき、見つかなかつた」

「探検帽？」

「探検家は誰でもかぶってる」

「一体、そんなもの誰が持つてるんだ」

「まあ、どうでもいい話はこの辺にしてさ。早く行こうよ」

お前がこの話始めたくせに、と僕は思う。

「ええと……どこに行くんだ？」

「ボートがあるところ。海に行くんでしょ？」

純はニンマリと笑う。「まあついて来てよ」ともったいぶるため、僕はやきもきしながらあとをつけて行った。しばらく歩き、ようやく純が足を止めたのは、川沿いの土手だ。そのの、背の高い草がたくさん生えて特に汚いところに純は降りて行く。枯れ草にからまって魚が死んでいて、僕は顔をしかめた。「うえー」とシロシロも言った。

「あつた！ これだよ、これこれ」

純は草の間からロープを引つ張って、たぐり始めた。新品らしきそのロープは、純がつけた物らしい。僕も協力して引つ張っていると、草の中でなにか大きい物が動いた。ギギ、と変な音がしたかと思うと、一気に僕たちの前に「ボート」が姿を現した。

「え、これ？」

ボートを見て、僕は思わず声を上げてしまった。

「……スワンじゃん」

「スワンだよ。すごいでしょ！」

登場したのは、どこことなくマヌケな顔のスワンボートだった。

「ほら、早く乗ってよ」

「なんで、スワンボートなんだ？」

「ちよつと遠くに湖があるでしょ。あそこ、スワンボートいっぱいあるじゃん。たぶんそこのが迷い込んできたんだと思う。そんなに壊れてなかったから直せたんだ」

純が直したボートなんて心配でたまらない。こいつ、折り紙すらマトモに折れないのに。僕は恐る恐るスワンボートに入る。足を置くとぐらりと揺れてひやつとした。床を見ると少し濡れていたが、水漏れしているわけではないらしい。古びているものの壊れてはいないことにほつとして、僕は後ろに荷物を置く。やや大きめのスワンボートなので、運転席の後ろに、人ひとり横になれるくらいのスペースがあった。

運転席に座ってペダルに足を乗せる。運転席と言っても、自転車みたいにペダルをこいで進む普通のスワンボートで、エンジンがあるわけではない。が、そんなことは気にならなかった。さつきまでの「スワンかよ！」という思いは消え去り、僕の胸の中には冒険者のようなウキウキがまた発生していた。

「航海士、準備は整ったか？」

純が低い声で冗談っぽく聞いてくるが、鼻で笑う気にはなれなかった。僕も声を上げて答える。

「準備オツケーだ、船長！」

「了解。それでは出航するぞ」

とても小学六年生のやりとりとは思えないが、その時の僕らは限りなく本気だった。真面目も真面目、ド真剣だ。いまだかつて、これほどまでに男心をときめかせる冒険があっただろうか？ これ以上、興奮を押さえつけることはできなかった。僕らが小学一年生だろうと六年生だろうと知ったことか。いくつになってもロマンをくすぐるものはくすぐるし、かっこいいものはかっこいいのである。

「出航！ 帆を上げろ！ 舵をとれーっ！」

船長（純のことだ）の掛け声で、僕らはペダルをこぎ始めた。船長（純）がハンドルを握ると、我らがスワンはきしみながらゆっくりと回転し、海を目指して進み始めた。

「これからどうするつもりでいるんだ」

僕はせっせとペダルをこぎながら聞く。ペダルは重いけど、流れがあるおかげで思ったよりスワンは進む。ここは川の幅が広いから、こいでいると川というより湖を航海している気分になる。

「川はいつかは海になる。でしょ？ だからこうやってこいで行けば海に出るはずだよ」

「……なるほど、すごいな」

純にしてはマトモなことを言ったので、僕は少々驚いた。こいつ、思ったよりも頭がいいのかもしれない。しかし、そんな単純な方法で海に出られるのか心配にもなる。

「なあ、今どの辺にいますか？」

「まだそんなにこいでないからね、せいぜい十キロじゃないかなあ。だってこの辺、僕だって来たことあるよ」

純が土手を指差す。確かに、見慣れたビルが見える。海なんてまだまだ遠いように思う。

こんな風にこいでいけばだんだん知らない景色になって、いつかは海に着くなんてなんだか信じられない。けれど、そんなことを思っている間にも景色は変わっていく。電車に乗って知らない景色を見るとワクワクするのと同じように、まだ知らない土地への期待が膨らんでいくのを感じる。

「ねえシロシロ、楽しい？」

「男の子ってほんと、変なことばっか好きだよな」

シロシロはリュックから顔を出して、外の風に吹かれている。言葉とは違って、思ったよ

り楽しそうであつた。海を見たいと言つたのはシロシロだし、昨日の夜だつてはしゃいでいたから、彼女だつて楽しみにしていたはずだ。

「このまま行ったら海に着くつて不思議だよな」

「ほんとに海と繋がつてゐるのかなあ、怪しくない？」

「僕も同じことを思つたけど」

「今思つたんだけど、私たち、きっと注目されてゐるよね。小学生がスワンボートで川下りだよ。そのうちテレビ局が取材に来ちゃうんじゃない？」

「その時は、家出が失敗した時だ」

「だね」

シロシロはクスクス笑つた。純がちらちらとこつちを見ているから、嫌な気持ちになつて「なんだよ」と僕はつっけんどんに尋ねる。

「ねえ涼ちゃんつて、マジで、ぬいぐるみとしゃべれるの」

「あのお、その質問何回目だと思つてる？ もう五百回くらい聞いた」

「まだ、五百回しか言つてないよ」純は真顔だ。「なんでしゃべれるの」

「知らないよ」

「そのぬいぐるみ、涼ちゃんの家で代々伝わる秘密道具だったりする？」

「はあ？」僕は思わず間の抜けた声を出してしまう。「違う。シロシロはUFOキャッチャーでゲットしたんだ」

「そうよ、こんなぬいぐるみがお宝なわけじゃない！」

シロシロもケラケラ笑っている。僕も釣られて笑うと「今、ぬいぐるみ、しゃべった？」と純は聞いてくる。しゃべったよ、と僕はうなずいた。

「なんて？」

『『こんなぬいぐるみがお宝なわけじゃない』だって』

「あ、女の子なんだ」

「そうだよ」

「シロシロって名前、変わってるよね」

「……名前の話はあまりしたくないんだ」

「あ、そう」

純は口をつぐんだ。正直、シロシロのことを答えるのがうざったくもあったから黙ってくれて良かったが、しばらく経つとまた、純はこりずにしゃべり始める。

「だけどき、やっぱりぬいぐるみはしゃべらないよ」

「うるさいな。シロシロは特別なんだ」

「初めのうち俺はさ、涼ちゃんが嘘ついてると思ってたんだよね。みんなの気を引きたいからぬいぐるみを持ち歩いてるんだって。みんなは優しいから、涼ちゃんは『お父さんの形見としゃべってる』っていうことにしてるでしょ。涼ちゃんはそうやって、優しくされたいんだと思ってた。でも涼ちゃんってかっこいいしなんでもできるでしょ。むしろ、ぬいぐるみとしゃべることをやめたら人気者になれる。だから、もしかしたらほんとにしゃべれるのかなーって思い始めてたんだ。コンビニでも一人でしゃべってたしね。でもさ、やっぱりぬいぐるみはしゃべらないよ」

「じゃあ、僕が嘘ついてると思ってるのかよ」

「うーん、だけどそれにしては会話がリアルすぎる。だから謎のまま。あと、涼ちゃんみたいなクール系男子が、ぬいぐるみとお話なんてファンシーなことをするはずがない」

「それは偏見だ」

「なに、ヘンケンって」

僕はもう面倒くさくなったので「さあ」と適当に返事をした。純は気にする様子もなく、

黙々とペダルをこいでいる。茶色っぽい水が波打って、蒸し暑さと混ざり合ってべたべたする。朝も終わって昼になり、だんだん暑くなってきた。ペダルをこぐ足もだるくなってくる。

「そろそろなにか食べない？」

純が言った時、僕はすぐに賛成した。一旦ペダルをこぐのを止め、リュックサックからおにぎりを二つとり出す。コンビニで買ったやつだ。純にも手渡す。運動したあとの体に、しよっぱいおかかか驚くほどきいた。純も同じだったようで、しゃべるのも忘れ、もぐもぐと夢中で食べていた。

「けっこう頑張ったよね、俺たち」

ふう、とため息をついて純がちらりとふり返る。後ろには、ぐんと川が伸びている。ここは一体どの辺なんだろう、と思う。見慣れた景色はない。ずいぶん遠くまで来たのかもしれない。

「あ、橋！ 涼ちゃん、橋だよ。レインボーブリッジかな？」

「んなわけないだろ」

頭上には真っ赤な吊り橋がかかっている、トラックや自動車が何台も通っている。おーい、と純が手をふった。歩道を歩いていた人たちがびっくりして僕たちを見下ろし、何人かは橋

からばたばたと手をふつてくれた。

「青春だねえ」

「青春だなあ」

青春という言葉の使い方すらよくわかっていなかったが、なんとなくそういう瞬間があるのなら今なんじやないかという気がした。回し飲みするスポーツドリンクのボトルに、水滴がついてきらきら光っていた。

「家出の途中のくせに、君たちつてのんきだねえ」

そんな様子を見ながらシロシロが笑う。

「のんきじゃないとやってられないだろ」

「涼介はのんきすぎるでしょ。ほら、小学一年生の時さ、避難訓練あったじゃん。涼介はなにが起こったのかわからなくて、なんとなくトイレに引きこもってたら先生が心配して助けに来たでしょ。私、涼介はどんな大人になっちゃうんだろうと心配したんだよ」

「あの時は、なにがなんだかわからなかったんだよ」

「涼介は冷静沈着すぎるんだってば」

「そうかな」

「なんの話してるの？」

純が会話に割り込んでくる。さみしがり屋かよ。でもシロシロとばかりしゃべってしまるのはちょっと可哀想なので、「家出中なのにのんきすぎるってさ」と教えてあげた。

「涼介と違って、俺は家出じゃない。冒険してるんだよ」

「……なんで純はそんなに冒険したいんだ」

「ロマンがあるじゃん。ずうつと遠くへ行くんだよ！」

僕は呆れ顔をする。この冒険バカは幼稚園児か。遠くに行きたい遠くに行きたいって、それなら電車にでも乗ってればいい。そこに「涼介だって、気持ちわかるクセに」とシロシロが茶々を入れる。確かに、旅や未知の世界に憧れていないといえば嘘になる、けど。

「遠くってどこだよ、東京とか？ アメリカとか？」

「どこでもいい。俺を知ってる人がいない場所」

ふうん、と僕は言ったがそこで、はたと純がいじめられていたことを思い出した。

「世界は広いって大人は言うでしょ」

「そうだな」

「でもさ、俺らが生きてる世界なんてちっちゃいよ。家と、教室と、そのくらい。地球がど

んなに広くたって、俺の世界は狭いんだ。そのちっちゃい世界に一人嫌なやつがいたらそれでおしまいだもの。だけどそんなにちっちゃいのに、俺らはそこから出られない」

そこで純は一瞬間を置く。その隙について「……なあ」と僕は言った。

「言いづらくてずっと黙ってたんだけど」

「なに？」

「……僕、トイレ行きたい。船止められない？」

「ここでもしちやえば？」

「……は？」

純は涼しい顔で、僕を見ている。

「だって川だから、流れていくでしょ？」

スワンをこぐのはなかなか骨が折れ、午後になると太ももが筋肉痛になってきた。流れが浅いところなんかではスワンが砂に乗り上げてしまい、押して進まなくてはいけないかった。そんなこともあって僕たちは止まってはこぎ、止まってはこぎを繰り返していたために、進み具合がいいとは言えなかったが、なんとか前には進んでいた。

その時、突然なにかが現れた。僕はぎよつとする。なんだこれ。横に壁みたいな物が現れたのだ。壁は前にも現れる。純は「なにこれ、なにこれ」と騒ぐだけで使い物にならない。本当になんなんだ、これ。

「あ、まずい！」

その正体に気づき、僕は叫んだ。

「貯水池だ！ 困い込まれるぞ！」

困い込まれるという表現が合っているのかわからなかったけれど、とにかくこのままだと川を外れて、水を溜める貯水池に入ってしまう。早くもドロドロした藻がスワンにからみついている。流れが吸い込まれ始め、ペダルが重く感じる。

「面舵いっばーい！」

状況を理解していない純が叫ぶ。いや「いっばーい！」じゃない。そんなこと言ってる場合じゃない。

「早くペダルをこげ！ 閉じ込められるだろ！」

「でもさ、貯水池もどこかには繋がってるんじゃない？」

「浄水場とかかよ」

「心も体も、クリーンになりそうだね」

アホなことを言いながらも、流れが貯水池に引き込まれていく現状をさすがにまずいと感じたのか、純もぐいぐいペダルをこぐ。

「ヤバイ、ヤバイ、流れが逆だ」

純がブツブツ言っている。ペダルをこぐ足が重い。流れに逆らっているのだから当たり前だ。足が動かなくなってきた。一回こぐたびに足が止まりそうになる。「進めえー！」と純が叫ぶ。少しでも貯水池から遠ざかろうと、僕はハンドルを必死でぐるぐる回す。

「船長もつとこげ、こげ、こげ！」

「航海士回せえー！ 進めえーっ！」

叫んだかいあってか、なんとか貯水池から遠ざかることができた。が、ハンドルを回しすぎたのが原因か、はたまたペダルをこぎすぎたのが原因か、なんだかスワンがアンバランスになってきた。明らかに傾いているのがわかるがどうすることもできない。どうやら無理な急カーブがいけなかったらしい。

「ねえ、ねえねえねえ、なんかヤバイよ、なんかヤバイよ」

「知ってる！」

僕は怒鳴ったがあとの祭り、スワンは静かに横へ倒れ始めていた。一旦そうなったらもうどうすることもできない。「ぎゃああー！」と純が絶叫して、なすすべもなくじゃぶんと水に落ちる。続いて僕も沈む。純を探そうとしたがスワンが邪魔で見えなかった。見えなかったがそれどころではなかった。僕は慌ててリュックサックの回収に向かう。まだかろうじて浮いているリュックを思い切り掴んで抱え、頭の上に乗せて立ち泳ぎをする。リュックにはシロシロが入っているのだ。

スワンは逆さとは言わないまでも、横になってぶかぶかと浮いている。もとに戻そうとしたが、水の中というのは思ったよりずっと自由がきかない。力を込めても流されてしまう。僕はなんとかスワンの首あたりに這い上がり、リュックを無事な位置まで持ち上げた。少しでも水に頭をつけるとにごった水が押し寄せてくる。ここ、深さはどのくらいなんだろう、見当もつかない。

「シロシロ、濡れてない？」

「大丈夫！」

くぐもったシロシロの声がリュックから聞こえ、僕はホッと胸をなでおろす。あの白い毛並みがこの汚れた水で泥まみれになるなんて耐えられない。しゃべろうとしたとたん、波が

きてぎふんと頭からびしょ濡れになった。川だからそこまで大きい波ではないが、川の水が口に入ってきて、一瞬息ができなくなる恐怖に襲われる。僕は目をつむり、必死でスワンにしがみついていた。しがみつきのながら、僕は急に心配になってきた。このまま溺れ死んでしまったらどうしよう。家出するとは言ったけど、死んじやいたいなんて思っていない。純はどこだ。流されてしまったんだらうか。あいつは水泳が得意だったっけ？ 確か走るのは苦手だったからもしかしたら……

「よいしょおー！」

横から突然なにかがぶつかってきて、スワンに載せていたリュックサックが宙を舞う。すんでのところで受け止めて「なにすんだよバカ野郎！」と僕は怒鳴った。が、スワンはどぼんと音を立ててもとの状態をとり戻し、再び川の上に浮かんだ。僕がなんとか中に戻ると、反対側からはアタックしてきた純が運転席に這い上がってきた。

「はあー、死んじやうかと思つたよ」

「純がどすんと運転席に座る。」

「純のせいでリュックが落ちるところだっただろ！」

「スワンが沈んだのは涼ちゃんハンドルを回しすぎたせいでしょ？」

僕らはしばしにらみ合ったが、「……争いはナシだ」「仲直りしよう」と握手をした。もはやけんかする気力が残っていなかったのだ。

「まったく、服がびしょびしょだ」

僕は肌張りついてくるTシャツをつまみあげ、ため息をつく。ふたりともぐったりしていた。ペダルをこぐ気力も湧いてこない。スワンも水浸しだ。

そのうち、太陽は徐々に落ち始める。周りの景色を見回せば、僕らはずいぶん遠くへ来ていた。夏は夕方になっても変わらぬ暑い。どこからか蝉の声と、誰かが弾くピアノの音が聞こえてくる。夕日がゆらゆら川面に反射してきれいだった。僕はぐったりとそれを見つめながら、ペダルをこぐこともできずにただ波に揺られていた。このままだと夜になってしまう。どこかで休まなければと思ったのは純も同じようで、呻くように言った。

「航海士、上陸しよう」

「……了解、船長」

僕らは力をふり絞ってペダルをこぎ、なんとか土手に乗り上げた。純が持っていたロープで近くの手すりにスワンを縛りつけ、それが終わるとふたりして土手に大の字で寝転がった。夕暮れの風が、乾き始めた服をさらさらとなでていった。横目にリュックからもぞもぞシロ

シロがはい出るのが映った。

「疲れたねえ」

「疲れたよ……」

僕は目を閉じる。徐々に降りてくる夏の夕闇が、僕らをそっと包んで覆い隠してくれるよう気がした。

「見てよ、涼ちゃん」

純の言葉に、僕は首だけ起こす。周りを見ると見たこともない場所だった。人も、町も、植物だって知らないように思える。

「遠くに来たなあ……」

僕はため息をついた。「遠くに来たねえ」と純もうなずいた。しばらくぼかんとしてふたりで空なんか見上げていたけど、「よし！」と言って純が体を起こした。

「夕飯にしよう」

僕も起き上がる。体はだいぶ乾いていた。リュックサックに近づくと、そばで丸くなっていたシロシロが「川臭い！ ネットシーみたいな匂いだよ」と言って僕から逃げた。

「ネットシーなんか見たことないくせに」

「見なくてもわかる。涼介、今ならネツシーの仲間になれるよ。匂いが一緒だから」

シロシロは真顔で言う。なにを言ってるんだか。僕はリュックを開ける。使える物はほとんどないように見えたが、早めに拾い上げたおかげで中身は無事なようだ。お札は濡れてしまったが、乾かせば使える。困ったのは純の荷物だ。あいつのリュックには食料が入っていたけど、波にさらわれて消えてしまった。

「涼ちゃん、俺、ひとつ走り食いもん買ってくるよ」

「変なもん買ってくるなよ」

「そのくらい大丈夫だから！」

純は僕の財布を手に、土手を上げて行つた。僕はその後ろ姿を見送りながら、地面に座り込んでぼーっとする。疲れた。蟬がまだ、どこかでジンジンと鳴いている。

「もー、涼介が溺れちゃうかと思つたよ」

シロシロが言う。本当に彼女が助かつて良かった。シロシロが川底で一生を過ごすことになつたらと思うとぞっとする。そんなに恐ろしいことはない。

「涼介、頑張つたよね」

「シロシロが溺れなくて良かった。でも、怖かつたよ。川で溺れるのがこんなに怖いことだ

とは思わなかった」僕は言う。「正直、溺れて死ぬかと思った」

「死んじゃダメだよ」

シロシロはじつと僕を見ていた。真つ青な目で、じいっと。

「死んじゃダメ。涼介は人間で、私はぬいぐるみ。どっちが大事ななんてわかるでしょ」

「だからなんだよ。シロシロは特別なぬいぐるみだ」

「涼介は人間なの。もう十二歳になるでしょ？ 私は年をとらないもの」

その言葉で僕は、自分の誕生日が明日だったということを思い出した。

「あ、なになに、なんの話してた？」

すると、純がひよこつと土手から顔を出す。手にはレジ袋。どうやらちゃんと食料を買うことができたらしい。「明日が僕の誕生日だって話してた」と僕ははぐらかす。

「え、マジで？ 涼ちゃん十二歳？」

「うん。明日の朝、四時くらいに生まれた」

「きゃー、おめでとー！」と純が裏声で騒ぐ。なんのモノマネなのか、もしかしたらモノマネですらないのか？ 僕の戸惑いも放って、純は続けざまに「ハッピーバースデイトウー涼ちゃんだね」と文法もめっちゃめちな英語をしゃべった。

僕はレジ袋からテキパキと物を取り出していく。焼きそばパンとぶどうパン、パックの牛乳が入っている。僕らはかなりお腹が減っていたため、無我夢中でガツガツと焼きそばパンを食べたから、すぐになくなってしまった。ぶどうパンは明日の朝ごはんのためにとっておいた。食べ終わるとあたりはだんだん暗くなってきた。僕のリュックにはランタンが入っていたので、それを使うとだいぶ明るくなった。

「純、海までどのくらいだろうな」

僕は牛乳をストローで飲みながら聞く。

「さあ。でもさ、もう近いんじゃない？ けっこうこいだよ」

「よくここまで来れたよな」

「ほんと、頑張った。俺らに乾杯！」

純は飲みかけの牛乳を掲げる。僕も掲げて乾杯した。なんだかゆかいな気持ちになってくる。ランタンの明かりに照らされて、達成感と誇らしい気持ちでいっぱいだった。もう少しなのだ。もう少し行けば海に出る。

「明日はきつと海が見られるよ」

僕はシロシロに話しかける。彼女はすでに眠そうで、とろんとした目をしながら「ほんと？」

と言う。なんの話かわかってるんだろうか。僕は苦笑いして「おやすみ」と言った。シロシロはすぐに眠ってしまった。

「シロシロだっけ、その子の名前」

純が言う。「そうだよ」と僕はうなずいた。

「俺、考えたんだけどさ。シロシロが涼ちゃんの想像、ってことはない？」

「純はさっき、『僕みたいなクール系男子が、ぬいぐるみとお話なんてファンシーなことをするはずがない』と言ったじゃないか」

「だけど、小さい頃って空想の友達とか、いるじゃん。涼ちゃんはそういう空想の友達を作って、それと会話してるんじゃないだろうか？」

「純、お前ってなにがあっても、お化けとか幽霊とか信じないタイプだろ」

「だっていないもん、そんなの」あっけらかんと純は言う。まるつきりファンタジーを信じないタイプなのか。

「だけど、そう考えると不思議なのはさ」

「純は人差し指を立てて続ける。」

「涼ちゃんは、シロシロに恋をしちゃってる、ということだ」

「はあ？」

「自分で生み出した空想の友達に恋しちゃってるとなれば、それはかなりヤバイよ。え、なんでびっくりしてるの？ どの辺？ 空想の友達ってどこ？ ヤバいつてどこ？」

「……恋しちゃってるとどこ」

「え、そうでしょ、違うの？」

しばらくふたりの間に沈黙が生まれる。純は話が噛み合わないことに驚いているらしい。

「ええと、俺もう寝ようかな……」

「そうだな」

僕はごろんと横になる。草のちくちくした感じがしばらくあつたけど、だんだん慣れて気にならなくなった。僕はさっきの純の言葉について考え始めた。

僕は好きになった女の子などいないし、シロシロ以外の女の子とはほとんどしゃべらない。だから恋がどういふものなのかわからないけどともかく、彼女のことは好きだ。そばにいないとそわそわして、一緒にいても少しそわそわするけどとても嬉しい気持ちになる。それが恋と言われればすんなり納得できた。シロシロの青い目や、白い毛並みや、しゃべり方や気まぐれさや自由さを僕は好きだった。シロシロは間違いなく、世界で一番きれいで、世界で

一番すてきなネコなのだ。

それじゃあやっぱり僕はシロシロが好きなのだ。

僕はなんだか温かい、優しい気持ちになって目を閉じた。

目が覚めたのは明け方で、まだ日も昇らないほど暗い頃だった。興奮していたので早く起きてしまったらしい。腕や足についた朝露が、風に吹かれてひんやりと冷たかった。

「行こっか」

純も起きていた。僕はまだ眠っているシロシロをそつとリュックに入れて、スワンのロープをほどくのを手伝った。地面で寝たからか、体のあちこちが痛い。純も体を曲げるたびに「いたたた」と呻いている。時間はかかったがなんとかスワンを川に浮かべ、早朝、僕は再び出発した。

「日の出はまだかなあ」

純がすっかりぬるくなったスポーツドリンクを飲みながら言う。

「このままこいで行けば見られるかもな」

「日の出って思ったよりも見ないよね」

僕は、昨日の残りのぶどうパンをかじりながらうなづく。早めの朝ごはん。まだ薄暗い朝の川は暗くにごっていて、世界は僕らだけがぼつんととり残されてしまったかのようにだった。見上げれば星が見える。こういう夜があったなあ、と僕は思い出す。僕がまだ小学校低学年のおちびだった頃、カブトムシをとりに行った帰りのことだ。すっかり暗くなった道をシロシロを抱いて帰った。静かな夜だった。シロシロは青い目で空を見ながら「世界が終わるならこんな夜かもしれないね」なんてつぶやいていた。

「涼ちゃんは、なんで家出したんだっけ？」

「えっと」

僕は雰囲気に流されて、なんとなく純にお父さんの話をしてしまった。母さんがお父さんと二回目の結婚をしたこと、弟が生まれること、僕のいない家族ができ上がっていくこと。それらの「緊急事態」に僕は十分慌てているつもりだったが、純は「冷静だなあ」と笑った。

「そういう時って普通は、お母さんの気を引こうとしたり、お父さんに逆らったりするんじゃないの？」

「無駄な悪あがきはしない主義なんだ」

純が苦笑いする。シロシロの言うとおり、僕は少しボートとしてるんだらうか。

僕は周りの暗闇を見つめる。暗くて川幅がどのくらいあるのかもよくわからない。ずいぶんと田舎に来てしまったらしい。互いの顔がかるうじてわかるくらいだ。

「こんなに暗いと幽霊船とか出そうだよな」

ふいに純がつぶやく。怖い話はとてつもなく苦手なので「出ない」と僕はすぐに言った。

「涼ちゃん知ってる？ 幽霊船の話」

「知ってる知ってるからしなくていい」

「死んだ船乗りがたくさん乗っててさ、ガイコツなんだけど」しなくていいと言ったのに、聞こえなかったかのように純は話し出す。「ひしゃくを持ってるんだ。それでさ、相手の船にひしゃくで海水を入れるんだ。相手の船を沈ませるためにさ」

「もうわかったから黙ってくれ」

別に、そこまで怖い話じゃなかったと思うのだけど、この暗闇のせいかわ僕はものすごく怖く感じた。だから純が突然「あっ」と声を上げた時、もう少しで「ひう！」と叫んでしまうところだった。精いっぱい押し隠して冷静な顔で「どうした？」と尋ねる。

「あれ、なんだと思う……？」

向こうの方に、きらきらした船があった。明かりがいっぱい点っていて、フェリーというほどではないけど大きい。観光のための「遊覧船」だろうか。でもそんな船、普通川にはいないはずだ。僕らはもしかしたら川を外れて、湖みたいなところに来てしまったのかもしれない。それか、ここがとても広い川なのか。

「もしかして、幽霊船だったりしてね」

純はニヤニヤしながら言う。こいつは怖い話を信じないタイプだから、幽霊なんかちつとも怖くないのだろう。僕を怖がらせるために言ってるに違いない。しかし僕は違う。めっちゃ怖がりだ。特に純の話聞いたあとでは、なんだかぐうぜんとは思えなくて気が気じゃなかった。だってしゃべるぬいぐるみがいるのだ。幽霊船くらいあったって何の不思議もない。

遊覧船はどんどんスワンに近づいてきた。「ヤバイ」と僕はつぶやく。寝起きの頭はうまく働かず、遊覧船がかなり近づいてからようやく僕らは足を動かし始めた。このままだとぶつかってしまう。遊覧船は少しも避ける様子がない。僕らは必死でペダルをこいだものの、昨日の今日で筋肉痛もあり、なかなか前に進まない。

「おい、純、止まるな！ もうちよつと頑張れよ！」

僕は裏返りそうな声をふり絞る。

「はあ……知ってるわかってるから！　せえーのっ！」

力いっぱいのごぎにスワンは前進した。かろうじて衝突は防ぐことができた。僕らの大騒ぎを気にする様子もなく、遊覧船は静まり返ったまま通過して行く。通り過ぎたあと、遊覧船のモーターが作り出す波のせいでスワンはぐらぐら揺れたが、ともかく沈まなくて良かった。

「なんかあの船、気味悪くなかった？」

船が見えなくなつたあたりで、純がボソツと言つた。

「な……なんで？　ぜんぜん！　ぜんぜん気味悪くなかつたけど？」

本当は僕も純と同じことを考えていたけど否定する。

「だってこんな時間に、遊覧船だよ。しかもあんなに電気ついてきらきらしてるのに、おかしいくらい静まり返つてたじゃん。あんな船見たことない」

「もう、この話はやめないか？」

「涼ちゃん怖がりすぎだよ。もしあれが幽霊船で、ガイコツがひしゃくで水を入れようとしてきたら、ひしゃくの底を抜いちやえばいいんだつてよ。タメになるね」

純はカラカラ笑った。僕は冷や汗ダラダラだったけどとりあえず笑った。あれはただの寝静まった遊覧船だったのか、それとも本当に幽霊船だったのかは確かではないけれど、この時の恐怖は絶対に忘れられないと思う。

「ぎゃー！」

その時、また純が叫んだから僕は今度こそ「ひあ！」と悲鳴を上げてしまった。

「なに、なに、なに！」

キレ気味で僕が叫ぶと「ペダル壊れそう」と純が言った。グラグラしていて、これ以上こいだら底が抜けるかもしれないと言う。しようがないからこぐのをストップする。スワンの限界がきたらしい。そもそも、これまで純の修理なんかで沈まなかったのが奇跡みたいなものだ。まあ、ここは流れがあるので、こがなくてもなんとか進むだろう。

こぐのをやめてしまうことがなく、僕は流れに揺られながら、学校のこととか家のこととか、どうでもいいことをボソボソしゃべった。

「あのさ、俺の話していい？」

純が言う。暗くてお互いの表情はよく見えない。いいよ、と僕は言う。

「昨日、世界は狭いって言ったでしょ」

「ああ」

「俺、いじめられて部屋に引きこもってた時があったんだ。するとどんどん世界が狭くなつてくんだよね。お父さんもお母さんも、俺をなんとか学校に行かせようって、カウンセリグとか医者にしよっちゅう連れてったよ。学校に行けないのは病気だと思ってたんだね。だから俺は怖かった。いろんな物が怖かった。どんどんみんなに嫌われて、俺は一人になってくんだ。全部終わりにしちゃいたいと思うこともあったよ。でも自殺とかはできなかった。明日が来なければいいとか言ってるくせに、死んじゃうのは怖かったんだ。勝手だよね」

ちやぶんちやぶんと波がスワンに寄せる音だけが響く。純は前をまっすぐに見て、ぼつんぼつんと話す。僕はそれをなんとなく聞くふりをして、真剣に耳を澄ましている。そっちの方が純が話しやすいだろうと思ったから。

「ねえ……涼ちゃんはそういうの、どう思う？」

「勝手なんかじゃない」

僕は思い出していた。カブトムシを捕ったあと、シロシロと歩いたあの夜の道での会話を。静まり返る夜に、シロシロが「世界が終わるならこんな夜かもしれないね」と言った時のことを。僕は怯えて「世界が終わったら、僕たち死んじゃうの？」と泣きそうになった。帰り

道「死んじゃうの怖いよ」「死んだらどうなるの?」と僕はしつこくシロシロに質問をした。シロシロはしばらく黙っていたけれど、最後に青い瞳を優しく細めて、こう言ったのだ。僕はその時のシロシロの口調を真似て言う。

「死にたくないのは、大切な物がたくさんあるからだよ」

純は僕をじいっと見た。

「それ、シロシロが言ったの?」

「なんでわかった」

「涼ちゃん、そういうキャラじゃないからね」

さらっと言われて僕はフクザツな気持ちになる。

「っていうか、シロシロ、いいこと言うじゃん」

「だろ」

純が初めてシロシロを褒めてくれたので僕は嬉しかった。後ろでシロシロの寝息が聞こえる。起きたら教えてあげよう。

暗い中、周りの景色が徐々に広がっていくのがわかる。懐かしい、不思議な匂いがある。この匂いを僕は知っている。さらさら風が耳元を過ぎていくのを聞きながら、僕はなんとなく

く急にさみしくなった。

「それでも、純は遠くに行ってしまうんだろ？」

「うん。いつかね」

純はうなずく。

「涼ちゃん」

「なんだよ」

「ありがとう」

その瞬間に、バキンと音がした。僕はとっさにリュックを抱え「なにが起こった？」と聞く。純は「ペダルがとれた！」と叫んだ。よりにもよってなぜ今なんだ、なにかの間違いじゃないか？ しかし足元には水を感じる。これはまずい。慌てている間にも水はどんどん入ってくる。昨日みたいにひっくり返るなら、どうにかしてスワンをもとに戻せばいい。が、今回は違う、スワンは今にも沈もうとしている。隣でズブツと音がして「底が抜けちゃった」と涙声で純が言う。ボート内には一気に水が入ってくる。水はもう腰まである。慌てながらも僕はなんだか、このべたつく水の感じを覚えていた。僕はリュックを高い位置に掲げたまま、水に顔を突っ込んでみた。「あー！」僕は叫んだ。「ああー！」純も同時に叫んだ。僕はバシ

ヤツと水から顔を出して言う。

「しよっぱい！」

純もスワンの抜けた底から足を出して怒鳴った。

「ここ、足がつくよ！」

その瞬間、太陽が昇ってきた。すごいタイミングだ。こんなにドラマチックな瞬間が現実にあるなんて信じられなかった。真っ赤な太陽が頭を出したのは、ビルの合間でも森の向こうでもない。平たい水平線がなだらかに広がり、太陽はそこからゆっくりと姿を現したのだ。ふわっと空が明るくなり、金色の光がたちまち夜を押しつけていく。潮の濃い香りが鼻をかすめていく。太陽が周りの景色を映し出していく。光に照らされて僕は目を細める。周りに広がるのは眩いばかりの青色だ。

……着いた。やつと着いた。やつと着いた！

純が立ち上がった。スワンがぐらりと揺れたが、僕は止めなかった。どうせ、もうほとんど沈んでいるようなものだ。純は立ち上がり、叫んだ。

「海だあー！ 海だ！ 海だー！ 海だー！」

僕も叫んだ。海の上で転がるようにして僕は叫んで笑った。お腹が痛くなるほど笑って、

笑いすぎで涙が出てきた。顔がびしょびしょになった。純はしばらく叫ぶことをやめなかった。半分沈みかけながらも、我らがスワンは朝日に向かって行く。足を出すと、確かにつま先の方に砂の感触があった。足がつくのだ。きよろきよろと見回せば、向こうの方に砂浜が見える。

「やったね、航海士。頑張ったねえ！俺たち、ほんとに、頑張ったなあ……！」

純は目を潤ませて海を見ている。青い海はどこまでも広がっている。波がチラチラと朝日を反射して光っている。海だ。本物の海なのだ。僕は自分を褒めてやりたかった。頑張ったのだ。僕らだって頑張ればこんなところまで来ることができたのだ。

思えば「達成感」とか「感動」とかを、本当の意味で味わったのは今が初めてかもしれない。そして、僕と同じようにはしゃぎまわっているやつが隣にいたというのがなんだか不思議だった。なぜなら僕はいつだって一人で、横にいるのはシロシロだけだったから。ぎやあぎやあ騒いでいる純をたしなめつつも、僕は純と来られて良かったと思った。

僕らは砂浜に無事上陸した。スワンは乗り捨てられ、沖の方で浮いている。あの勇敢な白鳥は、例え壊れたとしても、永遠に僕の歴史上に刻まれることだろう。

純は上陸したばかりだというのに「うわー！」と叫んで海へ向かって行った。少し湿った

砂にぺたぺたと純の足跡がついた。

「きやー、すごいね、海！　すごい！」

シロシロがリュックから出て、僕の腕に飛び込んでくる。僕はシロシロを抱え、海がもつと見えるように高く上げた。沖の方では、服が濡れるのも構わず、腰まで海に浸かって純が手をふっている。僕も手をふり返した。

「きれい。世界にこんなに広い場所があるなんて不思議じゃない？」

「地球の七十パーセントは海なんだ」

「ふーん。陸ってすごく狭いんだね」

シロシロはしばらく海を見つめていた。ぴゅう、と風がなんだか悲しい音で吹いた。

「ねえ、もう家出は終わり？」

「そういえば、家出してたんだっけね」

「それを忘れちゃダメでしょ」シロシロが笑う。だけど僕は本当に忘れていた。自分たちで暮らしていくんだと言っていたけど、スワンが沈んでしまった今、家出は終わりにするしかない気がする。だけど僕はガツカリはしていなかった。

「家出じゃなくなたっていいんだ。僕らはここまで来れたんだ。なんか……そっちの方が大事

なんじゃないかって気がする」

「ドライな涼介がそんなこと言うなんて感動ー！」

シロシロはおどけた。その口調のまま、さらりと言葉が続ける。

「涼介はねー、今、夢を見てるんだよ」

「……夢？ なんの？」

「夢っていうか、なんだろ。幻を見てる？ なんていうか……優しい魔法にかかっているのね、ぬいぐるみはしゃべったりしないの」

「どういうこと？ シロシロは特別だ」

「涼介は忘れるよ。今だけ夢を見てるから。魔法にかかっているから」

「なんだよそれ。シロシロが僕の想像だとしても言いたいなの？」

シロシロは青い目を僕に向けた。真っ青な、海と同じ色をした目だ。ぴゅう、ぴゅう、と風が吹いていく。銀色の風は明け方の海を揺らしていく。ぴゅうぴゅうと物悲しい音は、今から、なにかとてつもなく悲しいことが起こるといふことを示しているように思えた。

「涼介、魔法はいつか解けるんだよ」

僕はシロシロを見つめた。シロシロは穏やかな目で僕をジッと見つめている。青い目に、

白い毛並み。僕が幼い頃から好きだったもの。それを見つめながら、なんだかシロシロが遠くへ行ってしまふんじゃないかという気がした。

「ねえ私、どうやら君とはしゃべれるみたい！」

UFOキャッチャーのとり出し口から出てきた白いネコが、僕の人生をガラツと変えてしまふなんて思わなかった。あの日から僕らはずっと一緒だった。涼介のボーツとしてところが心配だとシロシロは言った。落ち着いてるくせに照れ屋なところが好きとシロシロは言った。彼女は自由に気ままで、眠たい時にはすぐ寝てしまふ。機嫌が悪いと口をきかなくて、ものすごく知りたがり屋で、気が強いけどちょっと甘えんぼだ。大嫌いと簡単に言ってしまうくせに大好きって簡単に言ってしまう。僕は恥ずかしくて一度もそんなこと言えなかったけど、言わなくても気にならないくらい、僕らはいつでも一緒にいた。僕らは走る。僕らは笑う。自転車をこいで坂を駆け下りる。望遠鏡で星を見上げる。屋上から紙飛行機を飛ばす。そんな日々になんだけ救われただろう。そんな彼女のことを、僕はどれだけ好きだっただろう。

「行かないでよ、シロシロ」

僕は泣いてしまいそうだった。だから唇を噛んで必死に涙をこらえていた。シロシロがどこかへ行ってしまおう、という予感ほ、もはや確信に変わっていた。

「シロシロがいなくなったら、僕は本当に一人になる」

「大丈夫、今は純がいるもの。それに涼介はもう、十二歳でしょ？ もうすぐ中学生だよ」

「だからなんだっていうんだよ！ ねえ、シロシロはどこに行っちゃうの？ シロシロがいなくなるんなら、僕は大人になんかなりたくない。十二歳になんかなりたくない」

「なりたくなくてもなるんだよ」

シロシロは少しだけ首を傾けた。彼女のあふれるような青い瞳にきらきらと陽の光が当たった。彼女はぬいぐるみだから涙なんか流さないとはいはずなのに、それはまるで泣いているみただった。シロシロはとてもさみしい顔をしていた。

「大丈夫、涼介は忘れるよ。一緒に本を読んだことも、自転車で隣の町まで行ったことも、私がいちゃべってたってことも忘れてしまおうよ。だから全然大丈夫、さみしくなんかない」

置いていかれたくなかった。忘れたらさみしくなんて嘘だと思った。シロシロがいな

くなったら僕は「お父さん」のいる家族の中ではじき出されてしまう。僕はシロシロがいないとやっていけない。シロシロと離れることなんかできるはずがなかった。

「ねえ、シロシロ」

僕は思わず口に出してしまった。

「……好きだよ」

言ってしまったから急に恥ずかしくなって、僕は真っ赤になったけど、シロシロは驚かなかった。

「なにそれ、知らないでも思ったの？」

からかうような口調でシロシロが言う。少しだけいつものシロシロに戻って、僕はホッとした。シロシロはころころと笑っていた。彼女の言うとおり僕は大人になれば、こんな何気ない瞬間すら忘れてしまうのだろうか。

「涼介は頭がよくてかっこいいから、たくさん友達ができるよ。大丈夫、私を好きだったことなんてすぐに忘れるから。涼介は私がいなくなたって生きていて、今度はちゃんと人間の女の子に恋をする。私じゃ代わりにならないの」

「そんなこと……」

「涼介はこれから大変なことがたくさんあるよ。すっごい辛いことも悲しいこともあるよ。でも涼介ならなんとかなる。私なんかいなくてもね。そうやって君は大人になるんだよ」

シロシロはグイッと僕に顔を近づけた。ふんわりと日向みたくない匂いがした。

「ね、涼介」

僕は泣いていたんだろう。シロシロは僕の頬に柔らかい鼻をくつつけて、涙を拭いてくれた。

「さよなら」

そんなに悲しい言葉を、僕は聞いたことがなかった。僕はぎゅうっとシロシロを抱きしめて、ポロポロ泣いた。こんなに悲しいのは初めてだった。どんなにきつく抱きしめても、シロシロはもうなにも言わなかった。シロシロは青い目で僕を見ていた。その目は動かない。その口はもうなにも言わない。シロシロはどこかに行ってしまった。僕の腕の中にいるのはぬいぐるみで、僕が好きだったシロネコはどこにもいない。

もしかしたらシロシロは最初から全部知っていて、僕をこの旅に連れ出したのかもしれない。最後に一緒に海が見たかったんだろうか。そうだ、そうに違いない。いつかは僕とサヨナラしないといけないことを、シロシロは知っていたのだ。まさか……出会った時から？ な

んだかもっと悲しくなった。

その時僕は、シロシロが人間だったらどんなに良かっただろうと思った。僕はほんとに、ほんとに、シロシロのことが好きだったのだ。

僕は顔をうずめたままで泣きじやくった。純が近くに來たのがわかった。それでも僕はワシワシ泣いていた。純はなにも言わなかった。僕らはただ隣に立って、海を見つめていた。

「純」

「なに？」

「僕はほんとに、シロシロのことが大好きだったんだぜ」

純はこくんとうなずいた。

「……知ってたよ」

波が足元の砂をさらっては引き返して、ざばーん、ざばーん、と遠く音がしている。僕はやっぱりボーツとしてしているらしい。シロシロが大事だ、と気づくのが、好きだ、と気づくのが、どうしてこんなに遅いんだろう。だから大切なものを大切にできないで、こんな風にボロボロ泣くことしかできない。

「僕らは大人になる。どんなに悲しくても、どんなに嫌でも、僕らは大人になるんだね。逃

げることとも隠れることもできない。でもさ」

海の上をさらさらと風が渡っていく。僕はもう一度、シロシロを抱きしめる。

「僕は、彼女を忘れやしないよ」

*

子どもにしか見えないモノがある。子どもにしか聞こえない声がある。

さよならをしたあの時、シロシロが人間だったらどんなに良かっただろう、と僕は思った。

もし今ここにシロシロがいて、彼女が僕と同じ人間の姿をしていたなら、僕はシロシロをどんなところへでも連れて行っただろう。一緒にソフトクリームを食べ、遊園地に行き、自転車で走り回り、学校でくだらないことを言い合って、彼女の手を引いて海を見ながら、僕はそのきれいな青い瞳を何度だって覗き込んだことだろう。

だけどやっぱり、シロシロは人間じゃない。

それでもあの優しい青い瞳を、話し声を、笑い方を、僕は忘れはしないだろう。人間じゃなくても構わない。むしろそれでいいのだ。僕が好きになったのは人間の女の子のシロシロじゃなくて、ぬいぐるみのシロシロなのだから。彼女がぬいぐるみだったことにも、彼女とサヨナラをしたことにも、きつと意味があるはずだ。……今はそう思うことでなんとか自分

を慰めているけど、本当はどんな姿だって構いやしない。もう一度だけでいいから彼女に会いたいと僕は思ってしまった。

僕はボタンをとめて、新品のカバンを持って立ち上がる。棚の上に置いた、白いネコのぬいぐるみを見て「行ってきます」と言う。外ではきつと純が待っているんだろう。入学式のあいっときたら、制服がブカブカでちっとも似合っていないかった。思い出したら笑えてきて、つい吹き出してしまった。

僕の「行ってきます」に重なるように廊下の奥から母さんとお父さんの笑い声がする。僕の弟をあやしているらしい。見送りはない、それでも僕はちゃんと生きている。

中学生になった僕はドアを開けて、強くまっすぐに歩いて行く。



天界レストランへようこそ

(68
〜
112頁)

「いらっしやいませ。ようこそ天界レストランへ」

顔をあげると小柄なおばあさんがひとり、不思議そうな表情を浮かべて立っていた。

わたしはそっと胸をなでおろす、よかった。

「ご案内いたします」

わたしは奥のテーブル席へと進んだ。おもわず早歩きになってしまい、あわててスピードを落とす。でも、八十代くらいに見えるおばあさんは少しの間隔も空けていなかった。

「すぐにお食事をお持ちいたしますので、少々お待ちください」

おばあさんはわたしの言葉に小さく頭を下げたが、すぐに顔を窓の外に向けた。

無愛想なわけでも、冷たいわけでもない。

ここに来るお客さんは決まってみんなそうだった。

「料理、できてますか？」

わたしの問いかけに振り向いた大柄の男の人は、言葉で答える前に視線を送った。目線の先にはできたてのオムライスが湯気を放っている。

わたしがそれを目でもとらえたことを確認すると、くるっと向きを変え、数秒前と同じ姿勢に戻った。大きな背中だけがこちらを向いている。

熱々のオムライスを右手で持ち、おそるおそる空いたほうの左手でスプーンとフォークが入ったケースをつかんだ。これだけはいつまで経っても慣れない。

「お待たせいたしました」

オムライスをおばあさんの前へゆっくりと置いた。その拍子にバランスが崩れてもう片方の手で持っているケースがテーブルの上へと滑るようにおどり出た。

がしゅん、とスプーンとフォークがぶつかる音が響く。

「失礼いたしました」

その音におどろいたのか、それまで窓の外をじっと見つめていたおばあさんが急にこちらを向いた。

怒られるかな。不安になったが、おばあさんはそのことを全く気にもとめていないようだった。ただ、わたしの顔をじっと見つめた。

「おじょうちゃんは何歳かい？」

「十二歳です、来月で十三になります」

「わたしの孫もね、あなたと同じくらいなのよ。もうすぐ十二歳、小学校六年生」
しわがれた声ではあったが、はっきりとした大きな声でおばあさんは言った。

「……そうなんですネ」

適当に相づちを打つ。この手の話は、まずい。

「お食事がお済みになりましたら、ご自由に外に出てかまいません」

わたしは深くおじぎをした。立ち去るときわたしはほんの少しだけ横目で窓を見た。窓の外は霧のような白いもやが立ちこめているだけであった。

「あ、かなみ！ おはよー」

寝ぼけた目をこすりながら教室のドアを開けると、ゆうなの元気な声が飛びこんできた。早く来たつもりだったが、すでに教室にはゆうなと数人の子がおしゃべりをしている。

「おはよ」

「ねえねえ、昨日のテレビ見た？ すっごく面白かったんだけど」

「日曜は……例のレストランにいたから」

「ああ、そうだったね。ごめんごめん」

そう言ってゆうなはバツの悪そうな顔をした。

ゆうなはわたしの小学校からの友だち。ゆうなのまわりにはいつもだれかがいる。この中学に入ってまだあまり友だちを作ることができていないわたしなんかとは違う。

「なに？ レストランって」

近くにいた女の子が聞いた。わたしじゃなくて、ゆうなに。

ゆうなはその視線を無視して、わたしに顔を向ける。

「えっと……」

まさか自分が答えなければならない状況になるとは思ってもみなかったので、あわてて言葉を探した。

「お父さんの弟、つまりわたしのおじさんが経営しているレストランに土曜日と日曜日の二日間だけ行ってるんだ」

「かなみちゃんは働いてるの？」

質問してきた子と初めて目があつた。名前すら分からない。

「ううん」

わたしはかぶりを振った。

「まだ中学生だからちよっと手伝っているだけ」

「そうなんだ」

女の子はさほど興味がなさそうな口調だった。

「かなみのおじさんのレストランはね、銀座にあるんだよ。ビルの四十階にあつて東京を一望できるくらいすつごく景色がいいのつて……まあ、あたしは一度も行ったことがないんだけどね」

「いや、ないんかい」

その言葉にゆうなをかこんでいた数人が笑う。

わたしはその輪から一步下がると新しい友だちにかこまれたゆうなの姿を視界のすみでとらえながら、レストランのことをぼんやりと考えた。

あの場所はふつうではない。明らかにながおかし。

だけど、ふつうとは違うなにか、の核心をいまだ見つけられていない。

いつか仕事に慣れたら、聞いてみようかな……。

「そういえば」

ゆうなが体をねじってわたしのほうを見る。

「かなみのお気に入りの高見くん、今日もいつもの場所にいたよ」

「ちょっと。声が大きいって」

「この教室からいくら叫んだところで一階までは届かないよ」

小声で返したのに、ゆうなは十倍くらいの声の大きさで言った。

ゆうなは、あつけらんかんとしている。

「どこがいいのかあたしには分かんないから、ほんつと不思議だわ。まあ顔は悪くないけどさ。あ、これいい意味だからね」

いい意味でもよくない意味でもどっちだっていいもん。

わたしはゆうなの背中に心のなかであっかんべーをすると教室のうしろの窓をながめた。

ゆつくりと近づいて、窓を開ける。

今日もいるかな。

わたしは胸の高鳴りをおさえながら、おそるおそる下をのぞきこんだ。

「……いた」

おもわず小さく声もれる。

いつもと同じ場所、音楽室のとなりの準備室のすみ。バリトンホルンを吹いている。ひとり、しかも人から見えにくい場所っていうのが、なんかまたいい。

わたしは、校庭の真んなかで行われているサッカーの試合を見ているふりをしながらときどき姿を見た。この距離だと音が聞こえないからくやしい。

高見くんのフルネームは、タカミハヤト。わたしと同じ中学一年生で三組。わたしは一組だから二つおとなり。部活は吹奏楽部でバリトンホルンを担当している。

ちなみに、わたしが知っている情報はたったこれだけ。

少ないって思うかもしれないけれど、中学に入学してまだ一か月しか経っていないから部活が一緒なわけでもない他クラスの男子のことなんて簡単に分からない。だから、わたしは手に入れることのできる情報はこれで精いっぱいだった。ちなみにこれを教えてくれたのは全部ゆうな。ゆうなは、人づきあいが上手で仲の良い友人が他のクラスにもたくさんいるらしく、わたしのために聞いてくれた。ゆうないわく、わたしの恋を見守るのが面白そうだから、らしいが。

恋じゃないんだけどな。わたしはそのとき心のなかで否定した。

声を出したら笑われてしまうと思った。

だけど、うそじゃない。

ひとめぼれだった。

そう言うともた恋だと言われるのだろうか。

二週間くらい前のこと。

その日は朝からいらだっていた。お母さんとけんかをして朝早くに家を出たわたしは、どうにか気分を落ち着かせようと校舎のまわりをゆつくりと歩いていった。いつも時間ぎりぎりのわたしにとって、それは珍しいことで平日の朝六時台は未知の世界だった。

だれもいないなあと思いつつ、校舎のわきを通りすぎようとしたとき、音楽室のほうからボーボーっという船の汽笛のような音が聞こえた。

急いで音のするほうへと走って行くと、ひとりの男子の姿が目に入った。その男子は金色の楽器を両手で抱えるようにして吹いていた。ユーフォニアムよりひとまわりほど小さいその楽器の名前は分からなかったけれど、その楽器とその男子から奏でられる音たちは間違いない。なくわたしをひきつけた。

ホルネットやアルトホルンのようにメロディーではない。

でも、場をまとめるような落ち着いた低音。

ひとつひとつの音、瞬間を大切にしているのが伝わって来る横顔。

その横顔は、笑っていなくても楽しいという気持ちを感じた。

今でもよく覚えている。

でも、わたしは吹奏楽部には入らなかった。

高見くんとは住んでいる世界が違う。

予鈴のチャイムが鳴った。

わたしはカーテンのすそを強くひっぱって、閉めた。

一限は委員会決めだった。

「中学一年生とはいえ、クラスそして学校の大事な役割を担ってもらいますから責任を持って決めましょう」

担任の先生がはつらつと言った。

学級委員、美化委員、保健委員……。

わたしは黒板から窓へそっと視線を移した。まだ四月だっていうのに雨がしとしと降り続けている。見える景色はずっと遠くまで白いもやがかかっていた。

なんだかわたしの心の中がそのまま映し出されているようにいやな感じ。

はあ。

どうすればいいんだろう。

「学級委員に立候補する人はいますか？」

ゆうながすぐに手を挙げるのが見えた。

「……もしわたしがゆうなみたいな子だったら、よかったのかな」

だれにも聞こえないほどの小さな声で放った言葉に、自分自身の心を強くえぐられたような気がした。

だれとでも仲良くできて、真面目でテストの成績もいい。おまけに入部したバトン部で頑張っていることをわたしは毎日となりで見てきた。

だから本当はゆうなとも釣りあわないんだろうな、わたし。

高見くんも、きつとそう。高見くんのはよく知らないけど、ろうかで見かけるといつも目立つ子と一緒にいる。

わたしとゆうなだったら間違いなくゆうなとお似あいだ。

小学生のころ、はつきりとそう思った。あれから、ゆうなと一緒にいることに引け目を感じる。ゆうなと高見くん、そしてわたし。別世界の住人。

「……ゆうなみたいに、なりたかったな」

もともと持っているもの以上に、頑張ることを避けているわたしが言うのもおかしいけれど。

「なんか言った？」

席に戻ってきたゆうなど目があった。

「ううん、なんでもない」

わたしはあわてて窓の外へ視線を戻す。

いくらながめていても、いっこうに雨脚はおさまる気配はない。

そんな気がして仕方がなかった。

それから変わらない毎日が続いた。

でもある日、びつくりする出来事が起きた。

一日が終わり、下駄箱の前で靴をはきかえているときのことだった。

「かなみちゃん、だよね？」

「なんで……」

言葉にならなかつた、振り向くと高見くんがいた。高見くんに話しかけられた……。

「覚えてるよ」

高見くんは目を細めてクスッと笑った。

「俺ら、幼稚園のころ一緒だった」

すぐには理解できなかつた。そんなまさか、こんな大事なこと覚えていなかったなんて。

「雰囲気変わったよね？ だから今まで気がつかなかったんだ」

幼稚園のころはもっとおしゃべりで明るい子だった、そう言われている気がしたけれどなぜかあまりいやな気分にはならなかつた。

わたしはあわてて靴をはき終えると、ぼそぼそと小さい声で言った。

「……高見くんも」

本当は高見なんて苗字の子がいたことさえも覚えていなかったけれど。

それが伝わってしまったのか、高見くんは笑って口を開いた。

「一緒に帰ってもいいかな」

いったいなにを言い出すのだろう。頭が真っ白になった。

いいかな……なんて。悪いわけない。

わたしは口角があがるのを必死でおさえながら、大きく首をたてに振る。

でもとなりでほほえんでいる高見くんの笑顔がとてもまぶしく思えてきて、なぜだかわたしにはもつたいないようにも感じた。

「元気だった？」

「うん、まあ」

わたしはしどろもどろに答えた。

それからわたしたちはぼつりぼつりと話し始めた。話すといっても、どちらかが質問して答える……ほとんど一問一答形式だったけれど。

「高見くんはなんの部活に入ってるの？」

「吹奏楽部だよ」

「かなみちゃんは？」

「とくに、なにも」

ありきたりな会話。しかも、高見くんの答えはわたしにとって分かりきったことばかりだけれど、それでも気持ちはずっと宙を舞うようにふわふわしてた。

「連絡先、聞いてもいいかな？」

別れるころになって、わたしは唐突に言った。

そして、すぐに後悔した。いくら話しかけてくれたとはいえ、調子に乗りすぎだ。わたしは言い訳をしようと口を開いたが、高見くんのほうが早かった。

「いいよ、ちよっと待って」

そう言うとかばんからボールペンを出して、メモ帳の切れはしにアルファベットを書きつらねていく。

「……いやじゃないの？」

「いったいどっからそういう考えが出てくるのさ。小学校一緒のやつらだって連絡くらいとってるし」

「だってわたし自信ないから……」

「俺とメールするのに自信なんているの？」

高見くんは吹き出した。

「ごめんごめん。でも、そういうこと言うなよ。そんなこと言ってたつてなにも始まらないし。まあ、俺もそう思うときあるけどな」

その自然な答え方に、わたしは心がすつと軽くなったような感覚を覚えた。

次の日の朝、ゆうなはわたしを見たたん、にやにやしなから近づいてきた。

「かなみ、聞いたよ。高見さんと帰ったんだって？」

「なんで、それを」

「あたしに隠すなんて無理な話よ、で、どうだったの」

ゆうなが完全に楽しむモードになっている。

「わたし、忘れていたんだけど、幼稚園が一緒だったみたいで……」

「え、待ってあんた。そんな大事なことを忘れてたの？」

自分でも思っていたことをゆうなに聞かれて、わたしもしっくり来なかった。

「……それで向こうが覚えていた、と。そんなことある？」

ゆうなが笑っているとゆうなの友だちが寄ってきた。

事情を説明すると、

「え、それってすごい偶然じゃない？」

「もしかして、運命じゃん？」

そんなことを口々に言われて、わたしは照れくさくなった。

「でも、それだけだって。……あとは連絡先聞いたくらい」

「うそでしょ。やるじゃん！」

ゆうなの友だちも自分のことのように喜んでくれた。

この日がきっかけでわたしはみんなと話すようになった。明るくなったとゆうなにも言われて、わたし自身も毎日が楽しく感じるようになっていった。

「よし今日はこれで完了」

最近いいことばかりだから一日があつという間に感じる。

「高見くんから来てるかな……」

早く外へ出てメールを確認したい。このレストラン内は電波が入っていないので、受信するには一度外に出なければならぬ。

でも、今日はまだやることがある。ずっと聞いてみたいと思いつつ、タイミングを計って

いるうちに六月の半ばになってしまった。ここで週末を過ごすようになって二か月と半分。まだまだ慣れてはいないが、ずっと聞きたかったことを、もう聞いていいころだろう。

「あの……ひとつ質問してもいいですか？」

「なんだい」

おじさんは皿洗いをしている手をとめて、低くて重みのある声で返してきた。

まるで高見くんのバリトンホルンのようだ。

「ここは、その、どんなレストランなんですか？」

「直球だね」

おじさんはカウンターの奥からわざわざ出てきてテーブルのイスに座った。わたしもとなりの席に座る。わたしはせきをきったように口を開いた。

「だって、このレストランにはメニューなんてなくて、それどころか、お客さんが来る前から料理を作っているじゃないですか」

おじさんはいつか質問がくることをあらかじめ分かっていたかのような顔つきでわたしの話を聞いている。

「それに、お会計だっぺないし」

「それで、かなみはどう思うんだい？　ここを」

「わたしは……」

まさか質問を返されるとは思ってもみなかったので、固まった。

「ふつうの人間が来る場所では、ないと思います。たとえば、その、亡くなった人とか」
笑われるかと思ったが、おじさんは顔色ひとつ変えなかった。

それどころか神妙な面持ちで何度かうなずいた。

「かなみの言うとおりでよ」

「え？」

わたしは数秒前に放った自分の言葉がにわか信じられなかった。

「じゃあここはあの世ってこと？」

「あの世かこの世かなんて、俺たちには関係のないことさ」

おじさんは淡々と言葉を並べる。

「亡くなったっていうのも少し違うな。亡くなる、のほうがきつと正しい。俺はここへ来た人たちに料理をふるまう。彼らにとつての最後の晚餐を」

すごいスケールの話をしているのにそんなことは気にもとめていないような話し方だ。

「最後の晩餐……」

わたしは舌の上でその言葉をそつと転がした。

小学校を卒業して春休みに入ったばかりのころ、ここを手伝う条件としてわたしはおじさんと二つの約束をした。

ひとつ目は、ここに入るときと出るときの入りを間違えないこと。

ふたつ目は、お客さんの身のうえについては、なにひとつ知ってはいけないということ。

ひとつ目の約束に問題はなかった。お客さんがいつも使う入り口とは別にカウンターのうしろに勝手口のようなものがあり、どんなに面倒でもたとえ遅刻しそうなときでも必ずそちらの入り口を使用するようにと言われただけ。

問題は二つ目であった。

知ってはいけない、というのは案外むずかしい。それはこちらが質問しないで済む話ではないからだ。お客さんのほうからなにか話しかけられたらあいでもなるべくふみこまないうよう努めなくてはならないし、また自分自身のことについてもなるべく触れないよう意識していなければならない。なぜなら、もし知りあいがレストランをおとずれたときでもこのルールは守らなければならないからだ。

いくら手伝いとはいえ、わたしは店員としてお客さんと接することになるからマナーのひとつだろうか。少し不思議に思いながらも、その程度に思っていた。

でもそう思っていたことが今ではばかばかしく感じる。

四月の終わりごろからうすうす感じていたことが現実だと知って、おどろいた気持ちとすつきりしない気持ちりが混ざりあっていた。

お父さんやお母さんはこのレストランの秘密を知っていたのだろうか。

知っていて平然とした顔でいつてらっしゃいなどと言っていたのだろうか。

おじさんはそんなわたしの心のうちを見すかしたように静かに言った。

「かなみ、ここは僕らと彼ら以外にはふつうのレストランに見えるんだ。外観はな。そして中には入れないようになってる。まあ魔法みたいなものだと思ってくれ」

わたしはどこからどこまでを信じていいか分からなくなった。

そしてすぐに、今聞いていることのすべてが本当のことで、信じるべきものなのだと思います。頭の中ではどうにか理解できていても心が理解していない。

だから話を少しだけ変えた。

「使用する入り口のこととは……なにか理由があるんですか？」

「入りのことはな」

おじさんはそこまで言いかけて口ごもった。

「いや、そこはふつうだよ。俺たち用とお客さん用で分けるためだ」
ふに落ちなかった。

このレストランで働いているのはわたしだけで、わたしが出入りする時間帯はお客さんが来る時間帯とずれているため、かちあうことはまずありえない。

でも、わたしの頭はもうパンク寸前だったので今日はこれ以上のことは聞かないでおくことにした。

「残りの皿洗い、手伝います」

わたしが立ちあがると、おじさんも席を立った。

そのあとは二人ともひたすらだまって、その日の仕事を片付けた。

「こちらがお食事になります」

わたしがテーブルの上に料理を並べると、小さな男の子はわあっと歓声をあげた。

「これ、ぜんぶたべていいの？」

テーブルの上にはいくつものお弁当箱のなかに色とりどりのおかずが並んでいる。わたしはそれを見て、幼稚園の運動会の日を思い出した。

「はい、もちろんです」

「おねえさん、なまえなんていうの？」

男の子と目があう。きらきらと輝くぱっちりとした大きな目だ。

「かな……あ、なんでもない」

わたしは途中まで言いかけて不自然に口をもごもごさせた。男の子は不思議そうにわたしを見ている。

ごめんね、言えない決まりなんだ。わたしは心のなかで謝った。

しばらくすると男の子は、わたしから目をそらし、料理に向きなおった。そして、両手をびったりとあわせる。

「……いただきます」

とても行儀のいい子なんだな。

わたしはうれしそうにご飯をほおばっている男の子の横顔を見つめた。

この男の子も……こんなに小さな子にとっても、これが人生で最後の食事なのだろうか。なんて残酷なんだろう。胸がきゅつと痛んだ。

あの話を聞いてから、楽しいと感じていたこの手伝いはちつとも楽しくなくなった。それどころか苦しいと感じるばかりだ。

もっともここに来る人たちの気持ちに比べたら……なんてことは百も承知だが。むしろ、そのことがよけいにつらく感じるこのひとつでもあった。

ふとエプロンのポケットに手をつつこんでスマートフォンを取り出す。

【新規通知一件 From 高見勇人】

画面に出ている通知を読んで、おもわずあつと声を出した。

そういえば今朝はあまり時間がなくて見れていなかったんだった。

レストランのなかで返信できないのがもどかしい。

今ならお客さんも少ないし見てきてもいいだろうか。ちらつとおじさんのほうに目を向けると、見てもいい、というようにうなずいてくれた。わたしは小さくおじぎをすると、足早にカウンターのうしろにまわった。

外に出るとほぼ同じタイミングで、あわててメールを開く。

『なんかあった？』

文面はたったそれだけだった。

わたしはそつとスマートフォンを胸にあてる。

最近わたしが考えていることなんて一度も話していないから、きっとわたしの様子を見て気がついてくれたんだろう。

そのことが、とても温かい。

高見くんは見た目だけじゃなく、バリトンホルンの演奏だけでなく、いやそれ以上にすごくすごくすごく中身も素敵な人だ。

なにかあった？ とメールしてくるところ。

大丈夫？ と聞かれたら大丈夫だよって答えるしかない。

でもなにかあった？ と聞かれたら。

意図しているのか。それともたまたまなのか。

どちらだとしてもレストランの話などできるわけないのだけれど。

だから代わりに別のことをメールした。

『高見くんは人生最後に食べるとしたら、なにがいい？』

返事はすぐに返ってきた。

『中学校の給食かな』

『え、そんなに好きなの？ お母さんの手作りよりも？』

『好きっていうか、最後でもいつもどおりに過ごしたいから』

意外だったけれど高見くんにとってこの質問は無人島に行くとしたらなにを持っていく？
くらいのレベルの話だからそこまで真剣じゃないのか。

でも、高見くんらしい答えだな。

なんだか胸のつかえがとれた気がした。さっきまでつららのように固くするどく凍っていた心のなかのなにかがゆつくりと溶けていく、そんな感じ。

高見くんと話しているときは素直になれる。

自分のことはきつとこれからも好きになれるいけないけれど、高見くんと話しているときの自分だけは少しだけ好きでいられるような気がする。

「かなみ、話さなきゃならないことがある」

「なに、おじさん」

最後のお客さんが帰ってすぐ、おじさんは唐突に言った。ずっとタイミングを狙っていたかのような口ぶりだった。大事な話なのだろう。わたしはテーブルをふいていた手をとめておじさんのほうに向きなあった。

「前にこのレストランについて話しただろう。そのときレストランの入り口のことについて聞かれたが、ごまかした」

ごまかした、そうはつきり言うおじさん。そういう人だから心から信頼できる。

わたしはだまって次の言葉を待った。

「お客さんが使っている入り口の外はあの世とこの世を行き来する場所だ」

ごくりとつばを飲みこむ。

「だからここにやって来るお客さんは、おじいさんやおばあさんでもみんな若いころの体力に戻るんだ。今まで不思議に思ったことはなかったかい？」

わたしは、うんうんとうなずいた。たしかにそうだ。

このレストランに来た腰の曲がったおばあさんも、つえを持ったおじいさんもみんな共通して歩みは軽快だった。

「かなみが普段使っているのは向こうのドアだろう」

そう言っておじさんはカウンターの奥に指をさした。

お客さんが普段使っている入り口を使ったことはない。約束もしていたし、なによりあの入り口までどのように来るのかを知らなかった。このビルはとても高いが、一階からエレベーターや階段で来ても必ずカウンター奥のドアにたどり着く。

「それはこれから起きるべきことを変えてしまうことにもつながるから」

「変えてしまう？」

「そう」

おじさんは淡々と言葉を並べる。

「要は生きている人間が行っていい場所ではないってことだ」

「それはどういう……」

おじさんの話していることの意味は分かっていたつもりだ。でも、どうしてもその次につながる言葉が見つけられない。

「俺にだって細かいことは分からないさ」

おじさんは困ったように頭をかいた。

「ただ、このレストランのなかは安全でも、ここを一步でも外に出れば、そこは少なくとも俺らのいる世とは少しずれている。なにかの拍子にそっちの世界に引きずりこまれてもおかしくはない」

わたしの顔がくもったのを見て、おじさんの表情がゆるんだ。

「いいこともひとつ教えてあげようか。これはあくまで聞いたことなんだが……。入り口から外はその人自身の思い出の場所があつて大切な人がいるって話だ」

思い出。大切な人。

なにげない言葉であるはずなのに、なぜかとても重たいように聞こえた。

「きつと俺が死ぬときはこのレストランがあるんだろうな」

おじさんはそうつぶやくと窓の外に目を向けた。わたしも続く。

わたしがその世界に行くときにはなにがあるんだろう。

家と中学校とこのレストラン、ママとパパとゆうなはきつといるなあ。

……高見くんはわたしの人生に在るだろうか。

「ねえ、かなみ」

昼休みのチャイムが鳴ってすぐゆうなが声をかけてきた。

レストランのことで頭がいっぱいだったわたしは、あいまいに返したただけであったが、次の一言ですぐに目の前のピントがあつた。

「高見のお父さんとお母さんのこと、かなみ知ってる？あの子の両親さ、高見が小学校二年生のときに離婚したんだって」

突然出てきたワードにわたしは頭が混乱した。

「だから今の苗字はお母さんの旧姓。元の苗字は、小林」

こばやし？ こばやしはやと……小林勇人！

その名前を聞いたとたん、わたしの頭にはひとりの幼稚園生の顔が浮かんだ。

ああだからか。だからわたしは高見という苗字を知らなかったんだ。

「……それで高見のお母さん、もうすぐ再婚するらしい」

「え、再婚？」

まだ消化不良のわたしの頭に次々とゆうなの言葉が入ってくる。

ゆうなはそんなわたしにかまうことなく、どんどん話を続けた。

「そう。それがね、どうやら上手くいつてないらしいの」

「上手くいつてない？」

「新パパは高見のことを好きじゃないみたい」

「でも、好きじゃないくらい……」

「かなみ、あんたばかなの？」

ゆうなの口調はいつものことであるが、今日はとくに遠慮がない。

「高見は男でしょ。やっぱ前のお父さん……高見の実の父親ね、の雰囲気がよく残ってるんじゃないかしら。新パパにとっては微妙よね」

「で、ここからは内緒なんだけど」

ゆうなは声をひそめた。

「その新パパがこの前、高見がいるなら一緒には住めないって言ったらしいのよ。けどまだ中学生だからひとり暮らしはさすがにできないでしょ。親戚もあまり頼れる人がいないみたい。それで高見、最近元気ないらしいの」

そこまで言うのと、ゆうなは手洗ってくるわ、と言ってその場を離れた。

高見くん、大丈夫かな。

わたしは窓枠に手をかけると、のぞきこむようにして一階を見た。そんな悩みを抱えているなんてわたし、全然知らなかった。音楽準備室。今日は電気すらついていなく、人の影もまるでない。

『高見くん、お家のこと聞いて心配になった。大丈夫？』

その夜、わたしはメールを送った。

でも、数日経っても返信はなかった。

それどころか、ろうかですれ違っても高見くんはわたしにあいさつすらしなくなった。

元に戻った、ただそれだけのこと。

わたしはくり返し自分にそう言い聞かせた。

ただもくもくと毎日を消費しているうちに気がつけば、外ではセミが鳴き始め中学生になって初めての夏休みが始まっていた。

「気をつけて行ってらっしゃいませ」

お客さんをお見送りしていると、こちらへ向かって来る人影が見えた。

「いらっしやいま……」

え。

わたしは口を中途半端に開いたまま、おもわず静止した。

高見くん……？

八月に入ってから会うのは初めてだった。ひさしぶりに見る高見くんはなんだか別人のよ
うに感じた。以前よりも少し痩せたのだろうか、真夏の照り付ける太陽を忘れさせるような
肌の白さだった。それでもやっぱり、かっこいいのだけれど。

「あの……」

高見くんの遠慮がちな声が、わたしを現実引き戻した。

「あつすみません、ただいま、ご案内……いたします」

しどろもどろになりながら、やっとの思いで言葉をつなげた。

そしてわたしはここでやっとな重大なことに気づく。

待って。

なんで、なんで。ここにいるの。

高見くんは席に着くまでのあいだレストランの中にいる他のお客さんと目があうたび笑顔で会釈をかわしていた。

死ぬ？ ……高見くんが？

そんなことあっていいはずがない。

自分の感情を必死におさえながら料理を運んだ。

高見くんはわたしに気づいていないようだった。いや、もしかしたら気がついていながらも無視していたのかもしれない。

目の前で高見くんがおいしそうにご飯を食べている。

人生最後の食事。

高見くんにとっての、最後の晚餐。

食べていたのは、中学校の給食だった。

あの答え、適当じゃなくて本当のことだったんだ……高見くん。

そう思ったとたんわたしの中になにかが動いた。

わたしはエプロンをその場で投げ捨てると、入り口まで走った。

「かなみ！」

うしろでおじさんの大きな声が聞こえた。無視して前に進む。

前に言われた言葉が頭の中で繰り返される。

「お客さんが使っている入り口の外はあの世とこの世を行き来する場所だ」

でも、それは同時にこの世にだって、帰って来られるってことだよな？ おじさん。

「それはこれから起きるべきことを変えてしまうことにもつながる」

高見くんがいなくなることは、それは、起きるべきことじゃないよね？ 高見くん。

危険でもなんでもいい。

わたしは大きく深呼吸をひとつして入り口を抜けた。

エレベーターに飛び乗ると、外の景色が急に目に飛びこんでくる。

おもわず、わたしは息を飲んだ。

いつもはオフィスビルであふれている町中にいろんなお店が立ち並んでいるのが見えた。

お店だけじゃない。スイミングプール、小学校、お花屋さん、そしてあれは家だろうか。人も

もたくさんいる。

「入り口から外はその人自身の思い出の場所があつて大切な人がいるそうだ」

このすべてが思い出……。

少なくともわたしの人生にはこんなにも多くの人は登場しない。これは高見くんだからこそなのだ。この中に、わたしのように高見くんの言葉に、氣遣いに、助けてもらった人は何人いるのだろうか。そして、これから助けられるべき人は何人いるだろうか。

でも。今、高見くんを助けられるのは、わたしひとりだ。

高見くんはまだ生きてなきやいけない。

わたしはその高見くんの思い出のなかを無我夢中で走った。

走っているあいだずっと、どこからともなく音がしていた。

これはそう、バリトンホルンの音。高見くんが吹く、バリトンホルン。

その音はわたしにエールを送っているように感じた。だから、いくら走ってもちつとも疲れなかったし、速度が落ちることもなかった。

いったい自分がどこを走っているのか、どこに向かっているのか、それすらも分からないままわたしは走り続けた。

しばらくして学校が見えてきた。

意を決して、校門をくぐる。

高見くんが学校にいる確証なんてないけれど、ここに着いたからにはきっと理由があるはず。わたしはそう信じた。

学校に入ってすぐ一人の女の子とすれ違った。

話したことは一度もないけれど、今はそんなことを気にしている余裕はない。

「高見くん見なかった？」

「さっき保健室に……」

女の子はわたしが制服ではないことに気づいて不思議そうにしていたが、かまわなかった。

保健室へ続く廊下をひたすら突き進む。

「だれか助けてっ！早くしないと高見くんが……！！」

保健室の扉を開けるなり、そう叫んだわたしに先生はまゆをひそめた。

「大したことないのよ」

「わたし、救急車呼んできます」

そう宣言して保健室を出る。

そのときだった。

ガッシャー—————

なにかが落ちたような、割れたような、音が響きわたった。

それと同時に悲鳴が耳に飛び込んでくる。

保健室に引き返そうと数歩進んで、わたしは足をとめた。そして、下くちびるをぎゅつとかむとわたしは体の向きを戻した。うしろは一度も振り返らない。

涙がほほをつたう。わたしはぬぐうことなく、もと来た道を急いだ。

なにが起きたのか、あの音がどういう意味なのかはつきりとは分からなかったけれどよくない想像だけがただただ頭を駆けめぐった。

レストランに戻ったが、高見くんの姿はもうなかった。

ああ間に合わなかったんだ。

わたしはへなへなと座り込むと、両手で顔をおおってしばらくその場から動かなかった。

長い長い夏休みが終わった。新学期。ひさしぶりの学校。

わたしは重たい足を引きずるようにして学校に向かう。

この数週間、わたしはなるべく考えないようにしてどうにか毎日を通りかした。でも、教室に入るとやっぱりうわさが自然と耳に飛びこんできた。

「ねえ、この前、保健室で天井の蛍光灯が落ちたらしいよ」

「あ、それ今朝あたしも聞いた」

「ありえないわ、こわすぎる」

「でも夏休みだからまだよかつたんじゃない？」

「吹奏楽部は部活があったらしくて……」

わたしはだれとも口を利かずに自分の席に着いた。

ゆうながわたしに気づいて近づいて来る。

「かなみ、ひさしぶりじゃん」

「ひさしぶり」

「あ、高見のこと……」

「分かってる！」

わたしは大声で言葉をさえぎった。

「足を怪我したって……」

大きな声におののいて消え入りそうになったゆうなの言葉をわたしは聞き逃さなかった。

「ゆうな……もう一回言って！」

「え、なに。いや、だから足を怪我したらしいよって」

わたしは目を見開いた。

「それだけ……?」

「それだけって? まあまあ大変だったらしいよ。入院してたって聞いたし……」

「そうじゃなくて、生きてるってことなの? ねえ！」

ゆうなの肩をつかんでゆらした。

「かなみ、あんた熱でもあるの?」

「かなみちゃん高見のこと大好きだもんね」

気がつくど、今にも泣き出しそうなわたしをクラスメートがかこんでいた。

うわさをまとめるとこうだ。

八月の半ばのあの日、吹奏楽部は部活をしていた。高見勇人は軽い貧血を起こして部活を抜け、保健室にいた。一番奥のベッドで休んでいたところ、なにやら外が騒がしいことに気づいた。なにかあったのかと体を起こすと、ちょうどそのとき上から蛍光灯が落ちてきた、そしてもしあと少しでも位置がずれていたらまずかった……と、まあこんな感じ。

どこのだれから話が広まったのかは分からないが、わたしの記憶とぴったり合致するからきつとほとんど正しいのだろう。女子のネットワークはすごい。でも、保健室に飛びこんできたひとりの女の子についての話は少しも出てこなかった。

残念……なのかな。

でも、高見くんはこの事故がきっかけで新しいお父さんとの関係が前よりもよくなったというのも聞いた。高見くんが入院しているあいだ、仕事で忙しいお母さんの代わりに面倒を見てくれたのがその人で、始めはお互い気まずかったけれど、一緒に過ごすうちに新しいお父さんも高見くんと同じで音楽好きになって分かって仲よくなったんだって。

これは全部、わたしがレストランを抜け出して走ったあの日、高見くんの居場所を教えてくださいました一組の子から聞いた。これまで一度も話したことはなかったけれど、わたしのことを

覚えてくれてたらしく、ゆうなを経由して昼休みにわざわざ教室まで来てくれたのだ。

……それがこの子、高見くと、つきあってるんだって。

それを知ったときは、おどろいてほんのちよっぴり泣いちゃった。

でも、この子ができないことをわたしはした。

そう思えるからわたしは幸せだ。

数日経って、わたしはひさしぶりに高見くんを見かけた。

校門の手前にあるベンチに座ってだれかを待っているようだった。

「ひさしぶり。わたしのこと覚えてる？」

クスクスと笑うわたしに、高見くんは恥ずかしそうに小さくうなづく。

「ひさしぶり……返信しなくて、ごめん」

「謝らなくてもいいのに」

「心配してくれてありがとう。今は大丈夫だから」

「うん、うわさで聞いたよ」

「そっか」

高見くんは恥ずかしそうに笑った。

ひさしぶりの会話はなんだかきこえない。それでも、こうしていることがなんだか不思議に思えてすごくすごく楽しくてうれしい。

「じゃあ、また明日」

「あのさ、夏休み、保健室来たりした？」

校門から数歩歩いたところでうしろから高見くんの声でした。

わたしは動きをとめた。

「なんで？」

「いや、来てないなら、いい」

わたしはなにも返さなかった。言葉を発する前に、目線の先に一台の車がとまったからだ。中から四十代くらいの男の人が出てくる。

「ありがとうございます」

高見くんの口調からはまだよそよそしさが残るが、相手の男の人は高見くんのバリトンホルンが入った大きなケースをなんの気なしに受け取っていた。優しそうな人だった。

「よかったね、高見くん」

わたしは新しいお父さんにつきそわれて車に乗る高見くんのうしろ姿に、にっこりとほほえんだ。

実を言うと、あれからレストランは手伝っていない。

クビになったわけじゃないよ。

たしかに約束は破っちゃったけれど、おじさんは無事に帰ってきたわたしを精いっぱいほめてくれた。もちろん、そのあとたくさん怒られたけれどね。

ただ、わたしが最後に見る窓の外の景色をいろんな人や場所でうめつくしたいって、思うようになったから。そのために今は、たくさんの友だちにかこまれて、毎日いろんなことに会って、全力で笑ったり、悩んだりしていたい。自分のために。この中学生という一生に一度しかない時間をていねいに過ごしたいってね。

それから高見くんからメールが返ってこなかった理由も今なら分かる。

あの日、わたしは自分のために高見くんを心配してあげてたんだ。きっとそれが高見くんにも伝わったから、だから高見くんはなにも言わなかったんだって。

今は思う。相手が知らなくてもいい、だれかのためにだれかを救いたい。自分にとって大切な人は自分のなかで覚えていよう。それで十分だ。だってそれは、この人生が終わる日が来るとするならば、その日のわたしを支えてくれるだろうから。

わたしはふと空を見あげた。

天界に届きそうなほど大きな高層ビルが西にかたむいた太陽の光に当たって、ゆったりとしたオレンジ色に染まっている。